

太宰治著述一覽稿(Ⅷ)

——自昭和二十三年六月至昭和二十四年一月——

山内祥史

人間失格(第一回)・展望・六月号、第三十号・昭和二十三年六月一日

発行・23頁・「小説」欄

『人間失格』(筑摩書房、昭和二十三年七月二十五日発行)に、全文収載された。

『太宰治全集第十五卷人間失格』(八雲書店、昭和二十四年十二月十日発行)に、全文収載された。

〔同時代評〕(M)『人間失格』(「世界日報」第六六七号、昭和二十三年六月十七日発行)には、つぎのように記されている。

太宰治という男は世間を憎み、その心は彼に圧迫を加えようとする外部のものへの怒りでいつも一杯だった。然し彼はいつも道化ては人を笑わせ、嘘をついては身をくらませ、唯一の生きる方法として小説を書いた。太宰芸術の一つの頂点をなした「斜陽」の中にも人は彼の素顔を見ることができなかった。然し「俺はこれを書いたら死ぬんだ」といつて書いた最後の長篇「人間失格」(展望六月)には、驚くほど率直に太宰の歴史が語られている。太宰という人間のたねあかしをすらしっているのだ。また「死ぬ前に思う存分悪口を言つてやる」といつて書いたという「如是我聞」(新潮四月、五月)では太宰は素顔でとびだしてげんこつを振りまわしてさえる。死のうという意図なしに

はこの二つの作品は絶対に語れない性質のものである。「如是我聞」の一見子供じみた「たなか」こそ彼の長年の渴望であつたのかも知れない。本音をはいたらもうおかしくつて生きてはいられないのだ。いつも酒をのんで酔つぱらつていなければならなかつたと同じように、死ぬ時にも白々しく一人でなど死ぬ筈もなし、死ぬる男でもなかつた。彼は死ぬために生きていたようなもので、悲劇はその死にあるのではなく、むしろ彼が生きていたということにあつたのである。

豊島与志雄「太宰文学」(「朝日新聞」第二三三八号、昭和二十三年六月二十一日発行)には、つぎのように記されている。

太宰治君は、何等かの愛情を持たなければ物が書けない人であつた。言い換えれば、作品は造形された一つの世界であつて、その世界のどこかの片すみに、彼は必ず一片の愛情を秘めている。客観的な冷静な態度で作品を書くということは、彼には出来なかつた。／＼この彼の愛情は、主として何に向けられるか。純なもの、やさしいもの、つまり無償の美へである。功利的ならぬ無償の美は、至つてもろく害われ易い。それは身を以て護らねばならない。随つて、汚れたもの、みにくいもの、えげつないもの、とげとげしいものなどすべて反対物を、彼は憎む。美への愛情が強ければ強いほど、美の反対物を憎むことも強い。——そこに、彼の作品の一方では優美さと他方では烈しさが由来する。／＼しかし、彼はまたそういう愛情と憎悪とを、なまのま、直接に表白することを、自ら照れる。照れ隠しに、己が愛情や憎悪を自ら踏みにじるような擬態さえも取る。つまり自分で自分を切り刻むのだ。そしてうそぶく。——そこに道化た面ばうが出来てくる。／＼優美

さと烈しさと道化た面、その三重の要素を、彼の文学は持つている。

こういう文学を創作実践することは作者としては捨身の業だ。泰然と冷静に計算して小説をこしらえあげることは、彼には出来なかつた。

たいていはぎりぎりのところで書いた。ここでもう、作者と作品との間に距離はない。——作者と作品との距離を縮めてゆくのが、近代

文学の一つの傾向である。この意味で、太宰文学は最も近代的と言える。／＼ところで、太宰君が作品の中に通わしている愛情の幾筋かの糸のその最も太い長い糸をたどつてみると、その先に、ほのぼのとした詩の世界がある。この詩の世界、つまり詩情の世界には、何があるのであらうか。それは、人間の心を、魂を、はぐくみ護る人情だ。かかる人情を象徴するものとして、雌ではない女、つまり一種の永遠の女性が描定される。その女性は、太宰君にとつては心の故郷として映じたらう。それに対する郷愁が、時として彼を寂しがらせた。——この憂愁が、更に彼を捨身にならせた。／＼太宰文学は、そういうものだから、この文学の世界にふみこむには、冷静な批評眼はかえつて邪魔になる。たゞそういう風に形成された世界を、好きかきらいかで決定される。好きな者はむしろ好きになるだろう。きらいな者は縁なき輩だ。恐らく太宰文学の一つの花である「斜陽」に対して、また、恐らく太宰文学の一つの総決算であるだろう「人間失格」に対して、とやかくの批評は不要で、単に好きかきらいかを言明するだけで充分である。——そこで、私は言おう、好きだと。

白井吉見『「人間失格」をめぐつて』（「日本読書新聞」第四四七号、昭和二十三年六月三十日発行）には、つぎのように記されている。

『人間失格』をかくために、作者が熱海に出かけたのは、三月七日だつたかと思う。この作品にかけようとする作者の情熱は大きく、これを裏切ろうとする肉体の衰えは、はたの眼にもはつきり見えていたので、例によつて明るい表情をよそおつて冗談などいいあつていたが、よくはこの作者のよく、よくにただならぬものを感じていた。今になつたからいい出すのではない。よく、よくなどいつてもよく然とした將來などというのではなく、この秋ごろ、だいたい九月ごろはあぶないぞと思ひ、何とか方法を講じねばならぬと、自分ひとりの心のなかで警戒していた。今度の相手の女性についてはいろいろ知つていたが、その時のよくの予感、女性などとはまつたくの無関係であつた。／＼九月というのは、『人間失格』がだいたい五月中ぐらゐに出来あがつて、つづいて七月から連載するはずの新聞のための『グッド・バイ』をかきあげてしまう時期に当るわけだが、その時があぶないぞという氣がしてならなかつた。／＼だいたい今年になつてから、この作者は自分に與えられている自然のいのちの残りの部分が、はつきりと意識されて來ていたのではないかという氣がした。これはいろいろのことで察せられたが、たとえば、いままでは弱氣にてれていて、同じ世代の作家のなかではおそらく一ばんともな教養をつみあげておりながら、評論一つ書こうとせず、まして主張や抗議の一片も書くことがなく、死の歌をうたいつづけ、世間に頭をさげてわびるような小説だけを書きつづけて來たこの作家が、『如是我聞』で提出しはじめた捨て身の抗議と糾弾のはげしさにも現われていたし、同時に『人間失格』をかきあげることに、異常に切迫した情熱をこめていることにもそれ

は察せられるものであつた。／そういう痛々しいものを感じていた際でもあつたので、『人間失格』の構想がどのようなものであるかは、立ちいつて聞こうとはしなかつたし、作者もまたあまり語ろうとはしなかつた。／ただ、ネガティヴのドン・ファンをかきたいといった言葉と、もう一つ、太宰は女しかかけないと臼井が軽べつしたから今度は男をかく、ぜひ臼井に読んでもらいたいといつてくれというような例の冗談にまじえた親愛の言ずてがあつたぐらいだが、それから察しても、近ごろの作品には女を主人公にしたものが多く、女を籍りて逆説的にいわば小出しに自己を語つて來ていたが、今度はいよいよ眞正面から全面的に自己を語るのではなからうか、太宰を出しきつた作品になるのではないかという氣がしていたのである。だから、ぼくとしては、『人間失格』で太宰自身を出しきり、語りつくしてしまつてから、衰弱が眼に見えて増して來ている肉体にむちうつてまで、『人間失格』にひきつづいて書こうという新聞小説では、いつたいどんなことを書こうとするのだろう、そのところにぼくにはかりかねる点があつたが、それにしても『グッド・バイ』という題名にもひどく氣にかかるものがあつた。／『人間失格』の第一回分、百三枚を書きあげて熱海から歸つて來たのは三月のおわりであつたかと思う。そして、この作品は果して多くの予想していたとおりのものだった。作家が自身の文学の最高のかたちで書きあげた遺書にちがひなかつた。／第二回分以後の百枚のうち五十枚は三鷹でかき、最後の五十枚は五月十三日に大宮の宿屋で書きあげたのだが、大宮へ出かける前に本郷へやつて來て、みんな一緒に酒を飲み、元氣らしい氣えんをあげたが、早く酔つてぼ

くの蒲團にくるまつて寝てしまつたが、朝になつて見ると、ヴィタミンやら眠りぐすりやらその一晚に注射したアンブールのカラが、どつきり多分二十本近くころがつていた。／さきにも書いたように、『人間失格』は文字どおり、太宰の遺書であつた。死ぬときに書き残して行つた遺書よりも、遺書である。太宰という一個の人間と作家が、その生涯をかけて書きあげた遺書であつた。／芥川龍之介は『ある阿呆の一生』から、むろんはみ出している。だが、『人間失格』は太宰治そのものである。自然主義的私小説に反抗しつづけた太宰が、それとはまつたく次元のちがつた場所、生活と文学に一分のスキもないものとして、自身を文学に化せしめた作品が、『人間失格』であらう。／『人間失格』は、また、太宰自身によつて書かれた最高の太宰治論でもある。おおかたの太宰論は、この作品の前にはすでに無用であり、これから現われる太宰論も、この作品の解説か、またはこの作品への賛歌か、反撥を語る以外に出ることはむずかしいだらう。彼がなぜみずから死んで行つたか、その死になぜ女性を伴つたか、最後の瞬間においても、死を共にした女性に對して、どのような考えをいだいていたかをも、この作品は明瞭に語るものであらう。／いかに死を共にした女性であらうとも、『人間失格』で吐露した彼の女性觀をくつがえすものであるはずはなく、それどころ逆に彼女の存在、彼女との交渉そのものが、一層強く『人間失格』の女性觀になつてはとびつたであらうことは疑ひない。／彼女自身の詳しい日記があるというがたといそれが発表されることがあつても、おそらく『人間失格』の眞実とは遠いものであらうと思う。彼女は彼女なりに太宰を理解したにちがひ

ないからである。

中島健蔵「太宰よ、さよなら」(「人間」第三卷第七号、昭和二十三年七月一日発行)には、つぎのように記されている。

わたくしの手もとには、今、『晩年』と、『斜陽』としかない。それに『人間失格』だ。その續稿は、筑摩書房の古田君に見せてもらう約束をしたまま、とうとうその暇がなかった。『晩年』を読みかえして、まざまざと思ひ出が浮んだが、やはり、太宰の生死にかかわりなく、思い通りのことを云つた方がよい。

高山毅「太宰文学と死」(「文芸首都」第十六卷第八号、昭和二十三年八月一日発行)には、つぎのように記されている。

例の昭和十一年の牧野信一氏の自殺事件にあつては、澤山の文章が現われたが、「神經衰弱だ、病氣でなくては、人間死ぬものではない」という世上一般のリアリズムに正面から反抗の意を示した文章は、河上徹太郎氏だけであつたと、小林氏は書いているが、十幾年を経過した今日は全く事情が一變してしまつたのであらうか。誰も彼もが、作家と死とを、統一的な必然な不可分のものとして論じている。或る戦後作家は、「人間失格」を読んで、直ぐにこのことの豫感を受けたと新聞記者に語り、多くの批評家は死を賭けてたたかつた誠實な作家といい、「アカハタ」もまた、小田切秀雄氏の同様な趣旨の文章をのせた。作家の死を葬むるにまことに立派である。文學關係者の一人としてばかりも嬉しくないではない。だが太宰氏の死は、果して作家的な行きづまりの上のそれであらうか。死というものを餘りにも神祕化して考へている點はないであらうか。死者に鞭打たず、といった東洋的な古風

なモラルにしばられていせぬか。ぼくはこうした疑問の言葉をさしはさまずにはいられないのだ。結論を先にいえば太宰氏の死の原因は肉體的衰弱からくる道化精神の弛緩、それにつけこんだ「女類」にしてやられた形ではなかつたかといいたい。／太宰氏は「人間失格」に書いているように人間の營みというものが全く分らず、しかし「人間に對する最後の求愛」として「道化」を考え出した。「自分は、人間を極度に恐れていながら、それでいて、人間を、どうしても思ひ切れなかつたらしいのです。さうして自分は、この道化の一線でもわすかに人間につながる事が出来たのでした。おもてでは、絶えず笑顔をめぐりながらも、内心は必死の、それこそ千番に一番の兼ね合ひとでもいふべき危機一髪、油汗流してのサーヴィスでした。」——このような場所に身をおいた、太宰氏の文學は、文壇登場そもその作品「虚構の彷徨」以來、ユニークな作家として遇せられて來た。しかし、日本でユニークな作家というのは、主流作家になれない傍流作家中のすぐれた作家の謂であつて、太宰氏の地位はそういつたところにズツとあつたといつてよい。道化者たることを意識して道化者となつていくということは、全く近代的な出來事といつてよく、その文學的開花はモツと注目されてよいことであつた。いや、モツと注目して高く評價されなければならぬはずの問題であつたかも知れない。だが、その文學的意義はあるにしても、やはり、それを強く主張するだけの作品が打出されなかつたことが、太宰文學を傍流文學たらしめていたことかもしれないのであるまいか。／(中略)／「人間失格」はぼくが太宰にあつてからあとで、熱海か伊東に行つて書かれたものだがぼく

は「斜陽」ほどの作品ではないと思つたものの、冒頭で引合いに出しておいた或る戦後作家のように、太宰氏の死を豫感することは出来なかつた。今年になつてから發表された氏の作品には「犯人」はじめ「櫻桃」その他、特にすぐれたものはない。「斜陽」というような傑作のあとの作家の生理は、當然そんなものではなからうか。芥川龍之介の小説的行きずまりとは趣を異にしているといわなければならぬ。

山本和夫「太宰治覚え書」(「文芸首都」第十六卷第八号、昭和二十三年八月一日発行)には、つぎのように記されている。

「どうせ、ばれるにきまつてゐるのに、そのとほりに言ふのが、おそろしくて、必ず何かしら飾りをつけるのが、自分の哀しい性癖の一つで、それは世間の人が「嘘つき」と呼んで卑めてゐる性格に似てゐながら、しかし、自分は自分に利益をもたらさうとしてその飾りつけを行つた事はほとんど無く、ただ雰囲気興味の興味が、窒息するくらゐにおそろしくて、後で自分に不利益になるといふことがわかつてゐても、れいの自分の「必死の奉仕」それはたとひゆがめられ微弱で、馬鹿らしいものであらうと、その奉仕の氣持からつい一言の飾りつけをしてしまふといふ場合が多かつたやうな氣もするのですが、しかし、この習性もまた、世間の所謂「正直者」たちから、大いに乘ぜられるところとなりました」(人間失格)／太宰氏の逆説的な説話體の文章は、たぶんにかういつた習性から來たのであらう。また、太宰の自虐性とか、虚無的感情とか、あるひは、潔癖、現世不信などいはれる太宰文學の根幹も、また、ここから出發してゐるのかも知れな

い。

白井吉見「太宰治論」(「展望」第三十二号、昭和二十三年八月一日発行)には、つぎのように記されている。

『葉』は昭和九年の發表、最も初期の作品である。彼の文學的表情はすでにこのときにきまつてゐる。「道化」の表情である。だが、實生活の表情がすでに少年時代からさういふものであつたことは「思ひ出」や「人間失格」が語つてゐる。「人間失格」では、「牛が草原でおつとりした形で寝てゐて、突如、尻つ尾でピシッと腹の蛇を打ち殺す」やうな人間本能のエゴイズムに對する恐怖におののき、かういふおそろしい人間に對する最後の求愛が道化だつたことを語つてゐる。「自分は、人間を極度に恐れてゐながら、それでゐて、人間を、どうしても思ひ切れなかつたらしいのです。さうして自分は、この道化の一線でわづかに人間につながる事が出來たのでした。おもてでは、絶えず笑顔をつくりながらも、内心は必死の、それこそ千番に一番の兼ね合ひとでもいふべき危機一髪の、油汗流してのサーヴィスでした。」／決して實生活を語らうとせず、それでゐて實生活の表情がそのまま文學の表情に化したところに、彼の文學の獨自性があるのだ。道化の一線でわづかに人間につながる事ができたといふが、それはむしろ人方にすぎない。人間を恐怖しながら人間につながるにはをれなかつた根本のものとして、彼においては「虚榮」があつた。『答案落第』のなかで言つてゐる。「ヴァニテイ。この強靱をあなどつてはいけない。虚榮は、どこにでもゐる。僧房の中にもゐる。牢獄の中にもゐる。墓地にさへ在る。これを見て見ぬふりをしてはいけない。はつきり向き

直つて、おのれのヴァニテイと對談してみるがいい。」彼におけるこのヴァニテイは、彼の育つた大地主的環境ときりはなしえないものであつた。彼は生涯それに反逆しながら、しかも別種の名門意識、彼の言葉でいへば「精神の貴族」を自覺してゐたのであるが、「薄汚い泥酔者」である「精神の貴族」は、ヴァニテイによつて辛うじて人間と世間につながつてゐたのではなからうか。／「あはれ、わが歌、虚榮にはじまり、喝采に終る。」これは彼が好評に迎へられた「斜陽」にあるひとにおくるときに、その扉にかきこんだ言葉だ。『虚榮』のむなしさとははれさ、それにもまして、「喝采」のむなしさとははれさは知りすぎるほど知つてゐた。まことに藝術家の、表現に對する貧乏、虚榮、喝采への喝望は、始末に困つてあはれなものであります」（『女の決闘』）とも言つてゐる。いたみやすい心の、清純で氣の弱い「薄汚い泥酔者」は、欲求としての「虚榮」と、方法としての「道化」によつて、辛うじて恐怖にみちた人間社會につながつてゐたのである。

／（中略）／最後の作品となつた『人間失格』は文字どほり太宰の自畫像であつた。『或る阿呆の一生』が芥川龍之介の自畫像であるといふやうな意味ではない。芥川龍之介は『或る阿呆の一生』をはみだし、または縮んでゐる。『人間失格』は太宰治そのものである。彼の文學の最高の結晶としての自畫像である。『ヴィヨンの妻』といひ、『斜陽』といひ、女性を主人公にして、逆説的に自己を語つてゐたのであるが、この作にいたつて、眞正面から全面的に自己を語つたのである。ある男の生涯に假託して、自己を語つてゐるのだが、過ぎ去つた實生活の記録や追憶を綴つてゐるのではない。彼自身の幼時を題材とした處女

作『思ひ出』と對照すればこのことは明瞭である。自然主義的私小説に終始反逆しつづけた彼が、それとまつたく次元のちがつた場所、生活と文學に一分のスキもないものとして、自身を文學に化せしめた作品が『人間失格』である。日本の私小説の傳統は、ここにいたつて、まつたくちがつた次元で、もつとも現代的な性格において開花した。

クボカワ・ツルジロー「人間不信の文學——ノート」（『文芸』第五卷第八号、昭和二十三年八月一日發行）には、つぎのように記されている。

共産党あるいはマルクス主義運動のような、現実の根本的な變革と、そのための人間變革とがもつとも烈しく行われざるをえない人間活動の中で、人間不信の思想が生れるということ、そしてこの人間不信の思想が多かれ少かれ戦後の新たな傾向を示している文學のいちぢるしい特色となつてゐるということ、さらにこの新たな傾向の文學は戦後文學の讀者の大きな魅力になつてゐるということ、——これらのことは戦後の新たな文學を見てゆくうえで見のしがたい事實である。／椎名麟三の「深尾正治の手記」や「深夜の酒宴」その他の作品、太宰治の「人間失格」、それから田中英光の「地下室から」など、すべてこの新たな傾向の文學を代表している作家あるいは作品だということができる。／（中略）／もちろん椎名の「深尾正治の手記」や太宰の「人間失格」や田中の「地下室から」を深刻でないとはいへない。ならば非難をまねがれないだろう。しかし眞の深刻性は新たなものの創造のための努力や、かかる努力を必死に求める新たな立場からのみ出てくる。このことは歴史上の眞の悲劇が歴史の發展のために活動した

積極的な人物の活動や行爲、それによつて生じた葛藤のなかにのみ求められるのと同じである。これらの文学は決してこのような意味で今日の民主主義革命によつてもたらされた新たな現実の立場に立つていない。

正宗白鳥、上林暁、中村光夫「創作合評（十六回）」（『群像』第三卷第八号、昭和二十三年八月一日発行）には、つぎのように記されている。

上林（略）今度、読んだ中では、太宰君の「人間失格」（展望六月）が、僕はページのなくなるのを惜しんだというほどではないけれども、釣られて読みました。／（略）／中村 太宰君の小説は、ごく初期の「虚構の彷徨」ですか、あのころから、つまり、私のことを書きたいのだけれども、それを書いている根氣というか、自信というか、押しというか、そういうものがない。だからあつちへぐるつ、こつちへぐるつといつて、非常に微妙な、あなたの今言われたようなけれども、いなことをやつていた。それが「人間失格」ぐらいになると、やつと自分を多少まともに話せるようになった。それがつまり、今までの小説と違つた、何か新しい自分というものゝと作家の關係、作中人物といるものがあるように思いますが、どうでしょうか。／上林 「人間失格」は一種の自己批判でしょうね。しかし、少し自分をいじめすぎているのじやないかな。／中村 あゝ程度のことなら、ああいう手のこんだ細工をつかわなくても表現できるんじゃないですか。まともに自傳を書いた方がはつきりしていいと思う。

徳田一穂「道化の真実」（『文芸時代』第一卷第八号「太宰治追悼特

集号」昭和二十三年八月一日発行）には、つぎのように記されている。

この八日であつたと思ふが、野口富士男氏が見え、正門前まで送つて出て、電車を待つ間、停留場前の本屋へ這入り、二人は六月號の「展望」を求めてゐた。私は、その晩、太宰治の「人間失格」を読んだのだつたが、太宰氏の道化の姿に、近親感を覺えながらも、何か腑におちない、わざとらしさと云ふか、いやらしさを味ひ、素直について行けないものがあつた。太宰氏の作家活動のはじまつたのは、確か二・二六事件の一二年前くらゐからではないかと思ふが、その後の十二三年間の日本の現實の中にあつては、若い知識人は、かうした道化の姿にでも託してゐなければ、眞面目に歩いて來ることは出来なかつたのではなからうか、私は、そんな風に考へ、一貫してゐる太宰治の道化の姿に、共感させられるのであつたが、「人間失格」は、何か一抹の後味の惡さを、私の心に殘すものであつた。／それから、一週間とは經たないで、私は太宰治氏の自殺を知り、驚いたと云ふよりも、何か太宰治氏の道化の文學の當然の歸結であるやうな感じがしたのであるが、死といふ重大な事柄がそんな風に安々と感じられるところに、太宰氏の文學の眞実があり、現代文學の苦しさの一面があるのを感じさせられるのだ。／自殺によつて、道化が眞実となり、いやらしさ、わざとらしさも、現世への置土産となるとともに、太宰治の文學は光つて來るのであらう。

福田恆存、椎名麟三、梅崎春生、梅崎勤、林芙美子、伊藤整、豊田三郎「太宰治氏の死について―座談会―」（『文芸時代』第一卷第八号「太宰治追悼特集号」昭和二十三年八月一日発行）には、つぎのよう

に記されている。

豊田 「人間失格」を読むと、最初に心中したときの動機なんかは、今度の自殺から見ると非常に単純な感じを受けますね。何か生活力に自信をうしなつたとか、あるいは社會に對する嫌惡というほど強くもないが、小遣錢がなくなつて、女に誘われたというようなことで非常にあつさり死ぬ氣になつておりますね。ほかの作品はどうですか。／

福田 それはそうですが、生活力のなさということですね、これは太宰治の場合かなり決定的ですね。

瀬沼茂樹 「太宰治の世界」(新日本文学)第二巻第八号、昭和二十三年八月十五日發行)には、つぎのように記されている。

「人間失格」は太宰治がみずからその世界を開いてみせた「或る阿呆の一生」である。彼は、生前身邊の友人たちに、この作品を「斜陽」にもまさる傑作だと自信をもつて語っていたというが、「斜陽」をそれほどに買わない私も、この作品には、心をひかれないわけにはいかなかった。「人間失格」は完成されているというが、まだ第一回分だけしか公表されていない。この公表されたところだけを鍵として、太宰治の世界を語ってみよう。／「晩年」にはじまる彼の文學は、道化と逆説と饒舌とにみち、そのことで觀念を支柱とした諷刺の世界を形づくっていた。つねに人間とその世界を裏返しにして、この裏返しにした心情からしか、この世を語ることはできなかった。このことは、彼がはじめから完全にこの世の人間の營みから隔絶していたことを示すもので、人間とその世界にたいする不信・絶望・恐怖から精神的な孤獨の世界におちいつていたといえる。彼は、隣人と共通する言葉を

もつて、これと會話することのできない孤獨の地獄で、自己の言葉(觀念)をもつてしか語ることができず、このエゴを他人に知られたいと望めば、他人には道化や逆説としか思われない形で、それ故に自己にたいする諷刺としてではなく、他人にたいする諷刺として、表現するしかなかった。／彼は生前自分の文學が諷刺として評價されることを心外だといつていたという。彼にとつて、その文學が諷刺として意識されなかつたのは、その道化や逆説や饒舌が、彼の言葉を用いれば、「人間に對する最後の求愛」であつたからである。彼はこの世の人間の營みからの隔絶を感じながら、なおもヴィニイの「狼」のようにその孤獨に耐えて苦痛を忍んで、男らしく沈黙を守つていられたからである。何らかの形で、自己の孤獨な心情を他人に訴えずにはいられない氣の弱さ、やさしさ、そこにひとを惹きつける孤獨な魂の純粹性があつた。この魂の純粹性がいわば彼の文學の徳であつたのである。／しかし彼の魂の純粹性は、はたして、實質的な意味で、その文學の徳であつたであろうか。彼は自ら人間生活の外にいて、自分は無だ、風だ、空だと感じながら、この無を基盤として價値の轉換を企てるだけの勇氣ももつていなかった。この無のうちに住みながら、氣弱にはにかみながら道化で、このようなところに自己のいることを知られたい、世間の人に氣づいてもらつて、いたわつてもらいたいと願っているにすぎない。彼は人間に訴えることが無駄であると絶望しながら、やはりその孤獨の淋しさを訴えずにはいられない。この人間への訴求が彼の文學であるとすればその魂の純粹性に動かされても、それはもはや文學の徳ではない。／彼は人間の日常的な營みのうちから、

價值を見出していくことはできなかった。人間がめしを食べなければ死ぬから、働いてめしを食べる、こういう人間のプラクティカルな苦しみ、またそこから見出している人間の幸福そういう人間の日常的な苦しみの性質や程度がまつたくわからない。これは、「空腹という感覺」がどんなものかまつたく解らなかったという比喩的な表現のうちから、何かを引き出してきても、彼にとつては無意味である。お互いにあざむきあいながら、清く明るく朗らかに生きている人間の生活が、人間の本質を蔽い、人間にたいする不信と絶望とを養うとすれば、まさにこの生活がそのように人間の本質を蔽う關係のうちにこそ、價值の轉換の契機を見出していくべきであるが、彼は、そこから人間生活を否定し、これと對立して、精神的な地獄に住い、そのことを却つて誇りとしたのである。／彼は人間の生活に對立した。このことは人間の生活の否定であつた。だから、唯物論の論理の必然性を必然性として肯定しながらも、この唯物論をもつて彼の「人間」を救うことはできなかった。人間の心に宿っている色と欲、いや、さらに「へんに怪談じみたもの」、これにたいする恐怖から解き放たれ、喜びを感じることができなかった。お互いにだましあいながら、清く明るく朗らかに生きている。そういうふう人間を色と欲との化け物にかえていく人間生活の祕密さ、その祕密のうちから解きはごしていくことはできなかった。かえつて、白痴や狂人や淫賣婦のように、はじめから人間生活の外にある人間にアフィニテを感じ、非合法の日蔭者のような社會運動の地下生活に、人間の實生活の否定された地獄の匂いを感じた。／彼は、こうして道義や因襲で飾りたてた人間の偽善を憎んで、これ

を剥ぎとつた。彼は自分のうちに純粹な「優しい心」を認めて、うつとりとしていた。そして、この赤裸な心を自己の無において認めたが、すでにこの無を突きやぶるだけの強靱な意欲をも失つていた。彼の文學にはしばしば福音書からの引用をきくが、地獄の底からの優しい心の祈りの模ようであつたにしても、ただうつとりと自分の優しい心をしたわり、これを精神的な限界狀況として新たな價值を、そこからさえも、求めることはできなかった。彼は精神的頹廢の深淵にあつて、價值を喪失し、その救いの祈りを、その自意識の嘆きを文學にうたつていった。「何でも無いものを、主觀に依つて美しく創造し、或いは醜いものに嘔吐をもよおしながらも、それに對する興味を隠さず、表現のよろこびにひたつてゐる。」それが彼の文學作法の虎の巻でもあつた。「斜陽」は、この意味で優美であるが、同時に脆い頹廢のすえた匂いがするのである。／太宰治の文學の世界がこれだけにとどまるものではないことはいうまでもない。「人間失格」にみる人間心理への洞察が、「水仙」や「新ハムレット」などに遡つてもみられるように、いつも人間を裏返してみるその見方から、養われていることはいうまでもない。だが、それらのものを説いていることはできない。「人間失格」は、最初から太宰治が人間に失格し、死への誘惑をもつていたことを示しているが、たとえば終戦後の作品でも、「おさん」や「犯人」のように死を實驗している。彼の死をきいて、この優しい心の持主を悼む人は多いが、その死に驚く人はない。ヴィヨンに擬えた詩人もすでに妻に語っている。「僕はね、キザなようですけど、死にたくて、仕ようがないんです。生れた時から、死ぬことばかり考えていたんだ。

皆のためにも、死んだほうがいいんです。」と。／（二六、二八）

小田切進「太宰治の死とその文学」（『文学時標』第五号、昭和二十三年八月二十五日発行）には、つぎのように記されている。

最後の、いわば遺書となつた「人間失格」が、いかに豊かな才能の展開を示しているとも、『晩年』の「思ひ出」の世界から、それはどれほど異なるところないものとして終らざるをえなかつた。

宮本忍「太宰治『人間失格』——一枚書評——」（『日本読書新聞』第四五四号、昭和二十三年八月二十五日発行）には、つぎのように記されている。

作家には昔から肺病やみがなかなが多い。ゲーテやシルレルもこの病気で苦しんだことがあると伝えられ、近くは島木健作もその一人であつた。／妙なことには、同じ病気で苦しんだ作家の書くものには二通りあつて、その一極を島木、他の極を太宰治が代表しているように思われる。島木の書くものは『生活の探求』の如く、人生と社会に真正面から取組んで行くという健康な意欲が感じられるのに、太宰の『人間失格』には、この病氣にとりつかれた人々が持つ特有のエゴイズムと絶望感がしみ出ている。／この太宰の小説は、どうひいきみに見ても病的であり、結核のためにボロボロにくずれおちた肺の中をのぞいて見るような印象を受ける。こんな小説をありがたがる人々は明日でも入水自殺をしたらよからう。それにしても女を追連れにするとか、上水に飛びこむことはやめて欲しいものだ。（一三〇円・筑摩書房）（筆者は医博・東京療養所勤務）

風巻景次郎「人間失格 太宰治著」（『北海道新聞』昭和二十三年八

月二十九日発行）には、つぎのように記されている。

この数年、太宰治が小説の読者層に浸み透るような魅惑を感じさせていたことは、紛れもない事実である。／その太宰が死んだことは、世間の話の種になつたけれども、彼は女が嫌いだったのだから、女が彼を水へ引っぱり込んだのだとか、すべてそうしたことは末の末である。／昔ゲーテは作中人物のエルテルを自殺させることによつて自身自身の危機を乗り切つたとかいわれるが、現代日本の知識人は、太宰を自殺させることによつて、皆が救われねばならぬ。けだし彼は唯一人で死んだのではない、大正昭和の病弊を一身に背負つて身がわりに立つたようなものである。／今年になつての最大の力作である『人間失格』は、彼のそうした秘密を独得の表現によつて、精細的確に伝えている点で、彼の総決算であり、遺言であつた。太宰にとつて『人間失格』は唯一絶対の遺書である。いい尽して余すところがない。

河盛好蔵「滅亡の民——太宰論」（『改造』第二十九卷第九号、昭和二十三年九月一日発行）には、つぎのように記されている。

太宰君は『人間失格』の「第三の手記」のなかで、彼の分身である大庭葉蔵に「自分は、皆にあいそがしいかはりに『友情』といふものをいちども実感した事が無く、堀木のやうな遊び友達とは別として、いつさいの付き合ひは、ただ苦痛を覚えるばかりで、その苦痛をもみほぐさうとして懸命にお道化を演じて、かへつて、へとへとになり、（中略）人に好かれる事は知つてゐても、人を愛する能力に於いては缺けてゐるところがあるやうでした。」と云はしめてゐる。私は太宰君の性格について何かを云はうとすると、彼自身が既にそれについて遙

かに正確で、的確で、厳しい言葉で表現してゐるのを見て、常にその誠實さに打たれるのであるが、「人を愛する能力に於いては缺けてゐるところがあるやうでした」といふ言葉は、血を吐くやうな告白ではないだらうか。尤も彼はすぐそのあとに、「もつとも、自分は、世の中の人間にだつて、果して、『愛』の能力があるのかどうか、たいへん疑問に思つてゐます」と書き加へてはゐる。しかし太宰君には、確かに人を愛する能力に缺けるところがあつたやうに思ふ。あんなに寂しがりやで、常にやさしい心を持ちつゞけ、人一倍愛情に飢ゑながら、人から與へられる愛情をすぐに重荷に感じて、よろめくところがあつたやうに思はれる。もつと適切に云へば、太宰君には、人を愛したい強い欲望に燃えながら、その能力について絶えず疑ひを抱いてゐるところがあつた。幼少の時から愛情を不自然に濫費したために、或は濫費させられたために、愛の能力が健全に發達せず、成年に達して早くも愛の能力の缺陷を感じてゐると云つたところがあつた。極言すれば、彼は愛の能力をあますところなく使用しえた快感と悦びを遂に感じることもなくして終つた悲劇的な人ではなかつたらうか。

亀井勝一郎「罪と死——太宰治論の一節——」〔文芸〕第五卷第九号、昭和二十三年九月一日發行）には、つぎのように記されている。

太宰がいつ頃からキリストを敬慕するやうになつたか。私はその直接の動機を詳かにしませんが、さきに述べたやうな舊家にまつわる倫理感が、つひにキリストの教に一つの生き方を見出したとも云へるでせう。しかし救はれるためでなく、救はれざるが故にです。つまり彼の逃亡は、彼にとつてつねに「罪」であつたのです。太宰の作品の根

底に罪惡感をみることは、非常に大切なことではないかと私は思ふのです。それは、遠くは舊家にまつはる罪業に發したものかもしれませんが、彼の意識においては、「罪」を犯すことなしには倫理は不可能であつた。太宰の虚構と云はれるものの中で、最も巧妙で、それだけ多くの血を流した虚構は罪の虚構です。／＼この鋭敏な批評家は、到るところに「俗」を發見します。「家」の中に、「社會」の中に、「自己」の中に。反俗は彼の本領です。反俗即反逆、そしてとゞのつまりは自虐に落着して、無頼漢と云つた形をとるのです。自己を裏切者、罪ある者として墮すことによつて、プロテストしようと企てたわけであります。「人間失格」の中に次のやうな言葉があります。／＼「自分は神にさへ、おびえてゐました。神の愛は信ぜられず、神の罰だけを信じてゐるのです。信仰。それは、たゞ神の答を受けるためにうなだれて審判の臺に向ふ事のやうな氣がしてゐるのです。地獄は信ぜられても、天國の存在は、どうしても信ぜられなかつたのです。」（第三の手記）／＼彼の語つた言葉の中で、最も興味ふかい言葉です。こゝに神との對決における彼の獨自性が、はつきりあらはれてゐるのではないでせうか。根底にあるものは、いふまでもなく罪の意識であります。彼のキリストに對したのは、「赦し」を乞ふためでなく、「愛」をうけるためでもなかつたのです。たゞ「罰」を信じてゐたのですが、肝心なことは、神は罰を與へなかつたといふ事実であります。彼は作家の勸をもつて自我流に聖書をよみ「愛」の言葉の中に、むしろ人を追放する鞭の言葉を聞いたのです。それは滅びに誘ふ言葉でした。大げさな比喩かもしれませんが、彼はパウロのやうではなく、ナルシスの

やうに聖書に對したのです。／太宰治はむろんキリスト信徒ではありません。聖書を愛讀しつゝ、彼は猛然と頭をもたげて神をみつめ、その權威に向つて、自己の權威を立てようとしたのです。自己の權威とは何か。彼が心中ひそかに企てたことは、神がもし自分を罰しないならば、自分で自分を罰しようといふことだつたと思ひます。神の領域を犯す傲慢な態度を以て、彼は自己に下すべき「罰」を計畫したのであります。つまり獨自の對決とはこの點なのです。「愛」の有無でなく、「罰」の有無について、彼は神を試みる位置に己をおいたのであります。何といふ傲慢でせう。何といふ虚構。これが彼が最後に、「斜陽」「人間失格」において試みた虚構の實態です。同時にこれが作家であることの證明なのです。／むろんかうした心の底には、自虐家の祈禱がありました。つまり彼は、ユダとしてキリストを愛さうとし、その愛故に、自ら「罰」を選んだのであります。自殺は、彼みづから、自己に下した「罰」だつたと思ひます。最も卑しめられ辱かしめられ、永遠に救はれざるものといふ烙印を自分の額に押すために。しかしそれは作品の裡に、計畫的に實行されてゐたところでもあります。作品とは、或る意味で作家に對する最大の刑罰でありませうから。

正宗白鳥、上林曉、中村光夫「創作合評（十七回）」（「群像」第三卷第九号、昭和二十三年九月一日発行）には、つぎのように記されている。

編集者 では、お願いいたします。今月は、太宰さんの死について——「人間失格」（出席者は校正刷で全篇讀了）に即しながらお話をうかがい、それから個々の作品合評にうつつていただくのでは如何か

と存じます。／太宰治の死について／正宗 それはいいでしょう、太宰問題は今どこの雑誌でも取扱つていて、ありふれたことだけれど……。

／上林 この前の合評會の歸りに筑摩書房に寄つたとき、白井さんかあなた（中村氏）かが、「人間失格」は太宰文學に新しくつけ加えるほどのものはないけれど、とにかく太宰文學の總決算だということを言われましたが、そういう感じを受ける作品じやないかな。從來いろいろ書いて來たことを締めくくつたような感じで、芥川さんが最後に書かれた「或阿呆の一生」というのにあたるんじゃないでしょうか。

／正宗 死ぬることを豫期して書いたものだということなんです。僕はあの人のものは、割合に読み易いから、ほかの人の作品に比べればよく讀んでいたが、今度ずつと通して讀んで、いくらかわかつたけれど、第一回はよかつたな。そしてこういう事件を背景にして讀むと、非常に興味がありました。特にああいうものは一度自分の度胸をきめれば、はなはだ書き易いもので、とても凡人に及ばぬような書き方ではないとも思つた。／上林 第三の手記の最後の方に、いろいろなゲームをやるところがありますね。ああいうところは非常にあの人の才氣がうかがえると思いますが……。／正宗 あの筆は全部才氣がある。

／中村 さつきも言われたように、僕はあの小説の中に、太宰君として新しいものは何もないと思つた。非常にできがよく、とにかく代表作になるものだらうけれども、やはりそこに何か疲れみたいなのがある。／正宗 第三の手記の方はやさしくて、素直になつて、もう世を去る人の心弱いところが出ているという、それはそうでしょうね。しかし、とにかく書き方に才能もあるし、おもしろい。ああいう氣持

というものは、僕なんかも同感できるところがある。初めの道化るところなどは、あれは人間たれでもが多かれ少なかれもつているものだが、それを露骨に現わしている。けれども度胸をきめてやれば——それは僕の考えかもしれないけれども、あれは書き易いものだと思う。あれだけのものが出て、それはちよつと變つた作家だという程度で、なにもそんなに重きをおくほどのものじゃないと思う。「人間失格」という大きな題目にしては浅いな。死を背景にして書いて深刻に見えるけれども、それは普通人でも死ぬる眞際の考えというものはそこにいくのだけれど、何かもつと深いものがないと……／上林 「グッド・バイ」というのは第一回を見たきりでは、なにか平凡だつた。／中村 あれはつまらないものらしいね。「人間失格」のあと、なぜあれを書いたかという問題だね。／正宗 「人間失格」はだれが讀んでもスラスラとおもしろく讀める。才筆だけれども、もつと、……淵の中を見るようなところはないな。「人間失格」という程の大きなものじゃない。／上林 それから、まえがきと、あとがきがある。ああいう文學的技巧を用いたところから見ると、まだ氣持に餘裕があつたんだな。／中村 あれは必要ないね。僕は太宰君の羞かみ屋のところ、それから人にわざと道化てつとめるようなところ、それが初期の作品では實生活のそういうことが手いっぱい、書くことはできなかった。それが「人間失格」になると、そういうことが自分で書けるようになったのはずいぶん成長で、これから伸びるのを楽しみにしていたのですが……。／正宗 あそこを潜り抜けて出れば、どうなつたかな。ならぬかもしれぬけれど、そこはその人の優れた天分があれば……。／中村 あの人

二十四五で小説家になつてしまつたんだから、辛かつたろうと思うね。

／正宗 そのときのものでも、やはり今の態度で、相當筆がよかつたのですか？／中村 よかつたです。／正宗 とにかく才人だな。ほかの人は、新しい人も含めて、ずいぶん鈍だが、あの人は才ばしつてゐる。だから僕はあの人のはおもしろいと思つて、ときどき讀んでいた。／中村 大作家じゃないけれど、小作家としてはいいですね。日本では大作家には、あまりいいのがないんじゃないでしょうか。ほんとに小作家にいい文學があるんじゃないでしょうか、葛西善藏とか……。あまり「大」のつく作家にいいのがないですね。／上林 僕はボードレールという人はよく知らないのだけれど、日本でああいう人を求めるとしたら、太宰君じゃないかしら。明治以來、後にも先にもないような氣がする。／中村 多少似ているでしょうね。

白井吉見「展望」(「展望」第三十三号、昭和二十三年九月一日発行)には、つぎのように記されている。

太宰は、少くともこの春さきころには『人間失格』と『如是我聞』をかきあげて死ぬつもりであつたのではないかとおもはれるところがあつた。そして、この二つはいづれも自分から進んでかかうとしたものであり、『人間失格』の執筆も自分から申し出たものだつた。そのあとで、朝日新聞からの依頼があり、結局、『グッド・バイ』が絶筆になつたわけだが、『人間失格』のやうな、彼の文學の集大成といふか、總決算といふか、さういふ意味ではじめて遺書的な性質の強く出てる作品が最後の作といふことだつたら自然といへようが、『人間失格』のあと、死の直前に『グッド・バイ』のやうな作品がかかれたことは

誰にとつても、奇異の感がするにちがひないと思ふ。『人間失格』を最後の作のつもりであつたのに、更に新聞小説をひきうけたことは、むしろわからぬことではない。「死なうと思つてゐた。ことしの正月、よそから着物を一反もらつた。お年玉としてである。着物の布地は麻であつた。鼠色のこまかい縞目が織りこめられてゐた。これは夏に着る着物であらう。夏まで生きてゐようと思つた。」これは、二十四歳のときの作品『葉』のかきだしの言葉である。『人間失格』をかいで死なうとおもつてゐたにしても、新聞から連載の依頼があつたのは、彼にとつて麻の着物をおくられたと同様だつたわけであらう。太宰が敗戦直後かいた『パンドラの匣』はいたつて明るい輕快な作品であるが、そのなかに、たとへば「僕は死をよいものだと思つた、とは言つても、決してひとの命を安く見ていゝ、加減に取扱つてゐるのでも無いし、また、あのセンチメンタルで無氣力な、死の讚美者とやらでもないのだ。僕たちは、死と紙一枚の隣合せに住んでゐるので、もはや死に就いておどろかなくなつてゐるだけだ。この一點をどうが忘れずにゐてくれ給へ」とか、「死と隣合せに生活してゐる人には、生死の問題よりも、一輪の花の微笑が身に泌みる」とか、更に、「死はよいものだ。それはもう熟練の航海者の餘裕にも似てゐないか」といふやうな言葉がある。處女作以來、彼の全作品は、ある意味では遺書であつたし、作家として出發してから絶えず死との對談者であつた彼として、「もはや死に就いておどろかなくなつて」ゐたことに誇張はなからうし、「生死の問題よりも、一輪の花の微笑が身に泌み」たのも自然であらうし、死に對して、「熟練の航海者の餘裕にも似」たものを抱い

てゐたこともまちがひはなからう。だから『人間失格』が絶筆とならずに『グッド・バイ』がそれになつたのは、わからぬことではないが、それにしても、一應奇異に感ずるのは、『グッド・バイ』の、あの野放圖もない明るさと笑ひである。この明るさと笑ひは、彼みづからのいふ「道化」とは性質のちがつたもののやうにおもふ。決してよそほひの道化ではなく、心からの明るい笑ひである。終始死の對談者であつた彼は、また終始心からの明るい笑ひを笑つてゐた作家でもあつた。／＼このことは、むしろ彼自身をもふくめて、人間の滑稽がいつも眼に見えてゐたことが根本であると思ふ。中村光夫によれば、西鶴は「コメデイとパロデイの名人」だといふ。これは花袋以後の西鶴論の眼鏡で強ひて着色して西鶴を見てゐるものにとつては奇矯にも聞えようが、虚心に西鶴をよむものには、しごくあたりまへの見解であらう。ところで、太宰が現代作家のうちで、無類のコメデイとパロデイの名人だつたことは、事新しくいふ要はあるまい。『走れメロス』『新ハムレット』『女の決闘』『新釋諸國嚙』『お伽草紙』その他がいづれもパロデイであり、そのほかの大部分の作はコメデイといつてさしつかへなからう。『グッド・バイ』がコメデイであることはことはるまでもないが、悲劇的な表情をたたへてゐる『人間失格』にしても、本質的にはコメデイと見るべきではなからうか。コメデイといひきれないにしても、少くともコメデイの要素をかなり多量にふくんでゐるとはいへるだらうとおもふ。結尾に近く、廢人同様になつた主人公の青年が、「六十に近いひどい赤毛の醜い女中」をつけられて療養することがかかれてゐるが、「自分はその間にそのテツといふ老女中に數度へんな

犯され方」をしたといひ、きのふはこの女中にカルモチンを買はせたら、まちがへて、ヘノモチンといふ下劑を求めて來たためにひどい下痢をしたことが語られてゐるが、實は、これは『人間失格』執筆中に、彼が死を共にした例の女性のやつたしくじりだつたといふ。死を共にした相手の女性を「六十に近いひどい赤毛の女中」に假託した一事からしても、遺書としての自畫像ともいへる『人間失格』の制作に、いかに旺盛な喜劇的精神が働いてゐたかは明瞭である。人間行爲に人間の滑稽を見ぬく精神がコメディを生みうるものであらう。コメディは、だから、豊かで透徹した批評精神の所産である。自己をもふくめた人間への冷徹な批評精神にしてはじめて生みうるものであらう。かういふ點からいつても、太宰の文學は、アミュージメントは豊富だがインテリジェンスに乏しいといふやうな批評を耳にしたことがあるが、まるで見當はづれといふほかはない。太宰の文學にアミュージメントを見出すならば、それは彼のインテリジェンスの所産にきまつてゐる。インテリジェンスと無縁なアミュージメントなどが文學の要素になりうるはずはない。

臼井吉見『人間失格』論（『光』第四卷第九号、昭和二十三年九月一日発行）には、つぎのように記されている。

『人間失格』は、三月八日にとりかかつて、五月一日にかきおえてゐる。構想がうかんだのは、昨年のおわりであり、この作品にかけようとする作者の情熱は、はげしく、これを裏ぎろうとする肉體の衰えは、はたの眼にも、はつきり見えてきていたところであつた。そして、そのころには、この作者は自分にあたえられてゐる自然のいのちの残

りの部分が、はつきり意識されてきており、同時に異常な決意が徐々に熟しつゝあつたのではないかと思われるふしぶしがあつた。作者は、この作品で、いままで女ばかりかいてきたが、今度は男をかく、ネガティブのドン・ファンをかきたいといつてゐた。ともかく、この作品は、作者が自身の文學の最高のかたちでかきあげた遺書であり、自畫像である。／單行本『人間失格』のあとがきに、僕はこのやうにかいた。だが、遺書であり、自畫像だというよりは、へんな言葉だが、遺書としての自畫像というほうが、正確であらう。ある青年の手記に託して、幼時からの彼自身を語つてはいるが、これは決して自叙傳ではない。自叙傳というものはまつたく性質のちがつたものである。みづから死を決意し、死に直面した現在のおのれのすがたを描いたもので、どこまでも小説であり、作品である。同じやうに死を決してから、かかれたものとして、芥川龍之介の『或る阿呆の一生』があるが、これは、断片的な自叙傳もしくは自傳的隨筆であつて、小説とはいひ難い。／「絲瓜咲いて痰のつまりし佛かな」というのは臨終における正岡子規の句であり、死に臨んでゐる自分を觀照してゐるもうひとり別の自分を獨立させることによつて、死に直面したおのれを作品化したものであつて、その制作態度のきびしさには、誰しもうたれぬわけにはいかぬけれども、それにしても、このような小さな句形は、瞬間的制作者が可能であり、むろんみづから死を決したわけではない。三月八日から五月十一日まで、二ヵ月あまりもかけて、死を決意したおのれ自身を二百枚の小説に化した太宰の場合のごとき、寡聞の僕は、ほかにその例を知らない。このようなきびしい制作者意識に徹しきつた作家

を僕はほかに知らないのである。／太宰は、これまでに、すでに三回自殺をくわだてており、そのことを三回とも小説にかいてきている。

『道化の華』『狂言の神』『姨捨』がこれである。だが、これらは、いずれも、みずから死をくわだてて失敗し、生き残つてから回想的にかかれたもので、その點『人間失格』とはちがつている。なお、これまでの三回の自殺のくわだてには、直接の動機、または原因があつた。最初のときは、大學に入つて間もなくのこと、非法法の左翼の政治運動から、仲間を裏ぎつて脱走したことが、ともかく彼に情死を決行させた最大要因であつたし、二回目の縊死については「色様々の推察が捲き起つたのだけれども、そのことごとくが、はづれてゐた。誰も知らない。みやこ新聞社の就職試験に落第したから、死んだのである」と『狂言の神』にかかれてゐることが、そのままではないにしても、生家の愛憎づかしと就職の失敗が、おもなきつかけであつたし、三回目、當時彼の妻であつたひとが、ほかの男とまちがいをおこしたことが大きな原因であつた。このように、今まで三回に及ぶ自殺のくわだてには、むろんそれだけではないしろ、それぞれ直接の動機なり原因があつた。だが、今度の四度目のくわだて、そして彼はついに目的を達したのであるが、今度のそれには、今までのような直接の動機とか、原因というべきものはなかつたと僕は思つてゐる。「小説が書けなくなつた」というような言葉が、遺書にかかれていたと聞か、すでに、昨年のおわり『人間失格』の構想がうかんだころには、これと、もう一つ、『如是我聞』をかつて死ぬつもりであつたらしいことが、いろんな點から察せられるのである。強いていえば、さきにかいたよ

うに、肉體の衰えから、自分にあたえられてゐる自然のいのちの残りが、すでにはつきり意識されてきたことを、直接の原因に數えるべきかも知れぬ。／もつとも、死に直面しての制作ということになると、太宰の全作品ごとく、そういうものであつた。彼の最初の小説集は『晩年』と題されているが、これらの作品をかつて彼は死ぬつもりでいた。『晩年』は私の最初の小説集なのです。もう、これが、私の唯一の遺著になるだらうと思ひましたから、題も、『晩年』として置いたのです」とは彼自身の語つてゐるところである。そういえば、『道化の華』にかかれた彼の最初の死のくわだては、二十二歳のときのことである。情死の片われ男、死にそこねた男、これが彼の青春の門出のすがただつた。「生きて行く力——いやになつてしまつた活動寫眞を、おしまひまで見てゐる勇氣」とは、彼の文學的出發の當初にかかれた言葉であつた。だから、彼のすべての作品は、ことごとく死に面するところから生れたものであつた。十六巻の全集に収まる夥しい作品を残して彼は死んで行つたが、そのことごとくが、人生を「いやになつてしまつた活動寫眞」と考え、それを「おしまひまで見てゐる勇氣」から制作されたことを思うとき、このような作家が、ほかにあるか否か、寡聞の僕は知らぬ。彼の全作品がそういうものだつたにしても、これをかきあげたら死のうという切迫した決意から制作された作品は、『人間失格』のほかにはなかつた。まして、彼自身を小説化した作品は、ほかになかつた。『人間失格』が遺書としての自畫像だといつても、更に以上のような意味を擔つてゐるのである。あらゆる小説のなかで、『人間失格』のもつ独自の性格がここにあるのである。

／『人間失格』は、ある青年の三つの手記と、それに附けた作者の「しがき」と「あとがき」から成りたつというかたちの作品であるが、第一の手記は、「恥の多い生涯を送つて來ました」という言葉ではじまり、つづいて、「自分には、人間の生活といふものが、見當つかないのです」と語りつづける。第一の手記は、幼時から小學校卒業までが語られているが、要するに、「人間に對して、いつも恐怖に震ひをのき、また、人間としての自分の言動に、みづも自信を持てず、さうして自分ひとりの懊惱は胸の中の小箱に秘め、その憂鬱、ナァヴアスネスを、ひたかくしに隠して、ひたすら無邪氣の樂天性を装ひ、自分はお道化たお變人として、次第に完成されて行きました」というプロセスが語られているのである。「互ひにあざむき合つて、しかもいづれも不思議に何の傷もつかず、あざむき合つてゐる事にさへ氣がついてゐないみたいな、實にあざやかな、それこそ清く明るくほがらかな不信の例が、人間の生活に充滿してゐるやうに思はれます」とあるやうに、東北の名門の豪家に生れて、多くの家族や下男下女たち、主として家庭のなかで、父にも母にも訴えようのない、訴えたところどうにもなるはずのない、かんじんの父母でさえ、難解なものを時折見せることのある人間への恐怖におびえるやうになつた少年期が語られてゐるのである。人間に對する恐怖というのは、人間は難解なものといふところからきてゐる。「自分には、あざむき合つてゐながら、清く明るく朗らかに生きてゐる、或ひは生き得る自信を持つてゐるみたいな人間が難解なのです」といふのがそれである。こうして、少年時代から、すでにほかのひとに對して、まつたく心をとぎすやうにな

つてしまつたいきさつが語られているのだが、「その、誰にも訴へない、自分の孤獨の匂ひが、多くの女性に、本能に依つて嗅ぎ當てられ、後年さまざま、自分がつけ込まれる誘因の一つになつたやうな氣もするのです」というところで第一の手記は終つてゐる。／第二の手記は、中學へはいり、家庭をはなれて下宿するやうになつてから、上京して高學校へ入り、「酒と煙草と淫賣婦と質屋と左翼思想」とを知るやうになり、やがて情死をはかつて、女は死に、自分ひとりが助かるまでの顛末が語られているが、「自分には、人間の女性のほうが、男性よりもさらに數倍難解でした」とあるやうに、この「難解な」女たちに次々につけこまれるやうになつたいきさつが、第二の手記以下の中心になつてゐるといつていい。「自分には、淫賣婦といふものが、人間でも、女性でもない、白痴か狂人のやうに見え、そのふところの中で、自分がかへつて全く安心して、ぐつすり眠る事が出來ました」とも語られてゐるやうに、女性という「難解」な「生きもの」のなかでは、淫賣婦にかへつて「同類の親和感」を覺えたと同様に、非合法の政治運動に携はることにむしろ「居心地」がよく、世の中の合法というもののほうが、かへつておそろしく不可解だつたことが語られてゐる。

／第三の手記は、情死事件のために、高等學校を追放されてから、いろんな女と複雑な關係を生じ、そのたびに傷つきやぶれ、とりわけ内縁の若い妻が、その無垢の信賴のゆえにひとに犯されてからは、いよいよ人間の奇怪さにおびえ、自分を責め苛み、半狂亂に近い状態におちこんでゆく経路が語られてゐる。自分の妻がひとに犯された場合、許すにしろ許さぬにしろ、「權利のある夫の怒り」で、どうにでも處

理できるトラブルであろうが、彼等の場合、「夫に何の権利も無く、考へると何もかも自分がわるいやうな氣がして來て、怒るところか、おごと一つも言へず、また、その妻は、その所有してゐる稀な美質に依つて犯されたのです。しかも、その美質は、夫のかねてのあこがれの、無垢の信頼心といふたまらなく可憐なものなのです。無垢の信頼心は、罪なりや。唯一のたのみの美質にさへ、疑惑を抱き、自分は、もはや何もかも、わけがわからなくなり、おもむくところは、ただアルコールだけになりました。自分の顔の表情は極度にいやしくなり、朝から焼酎を飲み、齒がぼろぼろに缺けて、漫畫もほとんど猥畫に近いものを畫くやうになりました」というように進行して行つたのである。彼は、いつの間にか漫畫家になつて、生計の資を得ていたのである。堪えきれなくなつて、死ぬつもりで眠りぐすりを飲み、三晝夜眠りつづけ、それからは苦痛をのがれるためにモルヒネを用いるやうになり、それが中毒になり、「死にたい、死ななければならぬ、生きてゐるのが罪の種なのだ、などと思ひつめても、やつぱり、アパルトと藥屋の間を半狂亂の姿で往復してゐるばかりなのでした」というやうにまでなる。やがて腦病院に入れられ、次いで生家の兄に引きとられ、「六十に近いひどい赤毛の醜い女中」をひとりつけられて廢人同様の日をおくるようになる。／「いまは自分には、幸福も不幸もありません。／ただ、一さいは過ぎて行きます。／自分がいままで阿鼻叫喚で生きて來た所謂『人間』の世界に於いて、たつた一つ。眞理らしく思はれたのは、それだけでした。／ただ、一さいは過ぎて行きます。／自分はことし、二十七になります。白髪がめつくりふえたので、

たいていの人から、四十以上に見られます。」／ここで手記は終つてゐる。そして作者のあとがきによれば、この手記をかいた青年は、生きてゐるか、どうかその後のことはさっぱりわからないことになつてゐるのである。／以上おおまかにすじがきをたどつたのであるが、この作品のうちで、一ばんすぐれてゐるのは第三の手記の部分であろう。／「東京に大雪の降つた夜でした。自分は酔つて銀座裏を、ここはお國を何百里、ここはお國を何百里、と小聲で繰り返し繰り返し呟くやうに歌ひながら、なほも降りつもる雪を靴先で蹴散らして歩いて、突然、吐きました。それは自分の最初の咯血でした。雪の上に、大きい日の丸の旗が出來ました。自分は、しばらくしゃがんで、それから、よれてゐない個所の雪を兩手で掘り取つて、顔を洗ひながら泣きました。／こうこは、どうこの細道ぢや？／こうこは、どうこの細道ぢや？／哀れな童女の歌聲が、幻聴のやうに、かすかに遠くから聞えます。不幸。この世には、さまざまの不幸な人が、いや、不幸な人ばかり、と言つても過言ではないでせうが、しかし、その人たちの不幸は、所謂世間に對して堂々と抗議が出來、また世間もその人たちの抗議を容易に理解し同情します。しかし、自分の不幸は、すべて自分の罪惡からなので、誰にも抗議の仕様がなし、また口ごもりながら一言でも抗議めいた事を言ひかけると、世間の人たち全部、よくもまあそんな口がきけたものだと思はれるに違ひないし、自分はいつたい俗にいふわがままのものなのか、またはその反對に、氣が弱すぎるのか、自分でもわけがわからないけれども、とにかく罪惡のかたまりらしいので、どこまでもおのづからどんどん不幸になるばかりで、防ぎ止める

具體策など無いのです。」／男と女とがまきおこすいくつかの動亂を経て、このあたりから、筆致は冷たく澄み、悲痛のいろをおびて来て、やがて、モルヒネ中毒から脳病院へ、そして、さきに引用した終局につづいている。／太宰がここに描いた自畫像は、人間の奇怪におびえながら、一ぱうその奇怪な人間に甘えたく、彼のいわゆる「サービス」と「道化」によつて、辛うじて人間社會につながつてきた訴えようのない孤獨と弱氣を嗅ぎ當てられて、女につけこまれ、また、すすんで女につけこまれずにはおられなく、破壊して行つた青年の半生涯にはかならない。彼のたどつた道は、「どこまでもおのづからどどん不幸になるばかり」で、彼として訴えようもなく、施しようもないものであつた。「人間に訴へる、自分は、その手段には少しも期待できませんでした。父に訴へても、母に訴へても、お巡^{まは}りに訴へても、政府に訴へても、終局は世渡りに強い人の、世間に通りのいい言ひぶんに言ひまくられるだけの事では無いかしら」とすでに第一の手記で言っている。所詮この青年の苦惱のごときは、「世渡りに強い人」から見れば、バカの骨頂であり、たわけごとにしかならないであろう。だが、バカの骨頂であり、たわけたことにしかなさないことに苦惱し、破壊したほどの弱者に徹することによつて、「世渡りに強い人でなければ生きてゆかれぬ人間社會に、はげしい抗議を投げたのである。第三の手記のなかに、同棲している女のアパートの部屋へかえつてくると、女とその子が平和に幸福そうに話しているのを耳にして、「幸福なんだ、この人たちは。自分といふ馬鹿者が、この二人のあひだにはひつて、いまに二人を滅茶苦茶にするのだ」と考え、そのままこつそり引

返して、それつきり別れてしまうことがかかっている。太宰の遺書の中に、「長居するだけ人を苦しめ、わが身も苦しく」という言葉があつたが、それとこれとはそのまま照應するものであらう。／そこで、『人間失格』の主人公のような男が、幸福に生きられるように、もしくは、このような男が再び出てこないように、人間社會を建て直さねばならないという議論もあるようであるが、それは早合點といつていいだらう。むろん、人間社會は、どこまでも合理的にたて直さねばならないことはいうまでもない。だが、『人間失格』の提出している問題は、それとはくいちがつている。どのような理想社會がもたらされようとも、この手記の青年がおびえた人間の「奇怪さ」が人間から失われなにかぎり、つまり人間が人間であるかぎり、人間におびえ、人間を失格したこの聲は、人間に對する消すことのできぬ抗議としてひびきつづけるにちがいないものである。／太宰の死は、この點で有島武郎のそれとはまつたくちがつている。どちらも人生の敗北者であつたことにかわりはないが、有島の場合、來るべき社會が階級を消滅せしめたそれではなければならないこと、それをもたらし得るものがプロレタリアートのほかにはありえないこと、しかも、自分の生れや生いたちは、決してそれに移行できないものであること、——彼を死に追いやつた根本のものは、このような敗北感にはかならなかつた。太宰の場合、彼が革命を拒むものでなかつたこというまでもない。だが、いかに革命が成就しようとも、人間が人間であるかぎり、無限に敗北するしかなかつたのである。有島は階級に敗北したが、太宰は人間に敗北したのである。『宣言一つ』と『人間失格』とをくらべるまでも

あるまい。／＼なお、このふたりの文學者は、いずれもその敗北を情死のかたちで完結した。だが、この二つの情死は、まるで内容がちがつている。太宰は人間を「難解」なものとし、とりわけ女性を「難解な生きもの」としたことは、『人間失格』にかかれているとおりである。だが、「難解」といつてもわからなかつたのではない。「難解」なものとして彼なりに、はつきりわかつていたのである。彼は、多くの作品、たとえば、『女の決闘』『男女同権』『嘘』『女類』などのなかで、くりかえし彼の女性観を吐露している。『男女同権』は、自分はいままで女性のためにひどい目にばかり逢つて來た、女の不意に發揮する強力な残忍性のために、ずたずたに切られどおしだつたが、男女同権という事になつたそうで、これからは男も女なみになれるわけでこんなにあるがたいことはないというような講演のかたちになつてゐる。『女の決闘』では、女性の特質として、「我利我利。淫蕩。無智。虛榮。死ぬまで怪しい空想に身悶えてゐる。貧慾。無思慮。ひとり合點。意識せぬ冷酷。無恥厚顔。吝嗇。打算。相手かまわぬ媚態。ばかな目惚れ。」その他を列挙していふ。死の道づれとした相手のなかにも、おそらくまざまざとこれを感じていたであろうことを僕は疑わぬ。『人間失格』は、こういう女につけこまれて破滅してゆく男の半生を描いているのだ。この作品の最後の部分で、モルヒネ中毒のために廢人同様になり、故郷の長兄に引きとられ、「六十に近いひどい赤毛の醜い女中」を付けられたことを語つてゐるのは、すでにかいたとおりであるが、この醜い女中に、「數度へんな犯され方」をしたこと、カルモチンを買いにやつたらへノモチンという下劑を買つて來たためにまち

がえてそれをもみ、ひどい下劑をおこしたことなどがかかれてゐるが、これは、太宰が『人間失格』執筆中、情死の相手であつた女性にカルモチンを買わせたなら下劑を買つて來てひどい目にあつたという話をその女性への輕蔑感をこめて語つたことがある點から考えても、情死の相手の女性のなかに、「六十近い赤毛の醜い女中」を感じとつていたことはまちがいない。では、そういう女性と、なぜ、情死までしたのか。『女の決闘』のなかに、さきにあげた女性の惡徳を列挙したのにつづいて、「女性にとつて現世の戀情が、こんなにも焼き焦げるほどひとすぢなものとは、とても考へられぬ事でした。命も要らぬ、神も要らぬ、ただひとりの男に對する戀情の完成だけを祈つて、半狂亂で生きてゐる女の姿を、彼は、いまはじめて明瞭に知る事が出來たのでした」とかかれてゐることがすべてを語つてゐる。あらゆる輕蔑と嫌惡を感じつつ、しかも、半狂亂の戀情にほだされての「サービス」が、彼に情死というかたちをとらしめたであろうことを僕は信じてゐる。これは單なる推量でなく、これを立證する幾多の材料があるのだが、そんなことよりも、「難解な生きもの」である女につけこまれて破滅した男の手記である『人間失格』を文學的遺書として残して行つたことが何よりも雄辯にこのことを語るものといつていい。／＼「世渡りに強い人」からすれば、こういう途方もなく阿呆な、馬鹿な骨頂の敗北者が太宰治であつた。死を決意した彼が、切迫した情熱をこめて、二カ月にわたつて完成した、その自畫像が、『人間失格』であつた。ところで、『人間失格』の手記は、さきにもかいたように、「自分はことし、二十七になります。白髪がめつきりふえたので、たいいていの人か

ら、四十以上に見られます」という言葉でおわつていて、その後は生きてゐるものやら、死んだものやら一切不明になつてゐる。太宰自身は四十歳で死んだ。自分の自画像を描こうとしながら、どうして二十七歳でうちきつてしまつたのであろうか。思うに、太宰は二十七歳のころにおのれの人間観、世界観を握つてしまつたのではなからうか。

「いまは自分には、幸福も不幸ありません。ただ、一さいは過ぎて行きます」と『人間失格』の手記はその末尾で語つてゐるが、これは太宰自身二十七歳あたりで決定的につかみとつたものであろうと思う。作品の上に徴してもこのことは明白である。その後死に至るまで彼の文學には本質的な發展もなければ、變化もなかつた。二十七歳で人生に結論を出してしまつた彼の文學は、その後一貫して白鳥の歌を歌ひつづけたのである。その意味からいつても『人間失格』は晩年になつてようやく到達したというような世界ではない。ここにあるものは太宰として、珍しく新しいものはひとつもないといえる。材料も大部分は處女作以來御馴染みのものである。そういう意味で、『人間失格』は、太宰文學の集大成といつていい。ただ彼が彼のほとんど全作品で駆使した材料をことごとく拉し來つて全面的に自己を語り、自画像を描きあげた點において、更にまた、それが單なる過去の作品の集大成でなく、みづから決意した死を前にして、切迫した情熱によつて、それを彼の最後の白鳥の歌にまで高め得てゐるのである。

正宗白鳥「近松の心中物」(「婦人文庫」第三卷第九号「特集 愛と死の問題」昭和二十三年十月一日發行)には、つぎのように記されてゐる。

太宰治も芥川龍之介も、死の直前に、自己を、夢を見てゐる痴人に見做してさまざまの述懐をしてゐる。「人間失格」だの「阿呆の一生」だのと、殊更らしく云つてゐるが、古今の文學者でをりくあゝいふ氣持を経験するのは珍しい事ではないだらう。「人間失格」のうちに「人に好かれる事は知つてゐても、人を愛する能力に於ては缺けてゐるところがあるやうでした(もつとも、自分は、世の中の人間にだつて、果して愛の能力があるのかどうか、たいへん疑問に思つてゐます)そのやうな自分に、所謂親友など出来る筈はなく、そのうへ自分には訪問の能力さへ無かつたのです。他人の家の門は自分に取つて、あの神曲の地獄の門以上に薄氣味わるく、その門の奥には、恐ろしい龍みtainな生臭い奇獸がうごめいてゐる氣配を、誇張でなしに實感せられてゐたのです」と云つてゐる。近松の心中物の男女はどれも人懐っこく、愛の能力もありさうで「人間失格」的人物とは正反對であるやうだが、これは、近松が傍觀的作家として柔かく美化し夢幻化して取扱つたためであつて懷疑的眼光で見えてゐたら、近松の心中男女も人間失格の素質を具へてゐたのではあるまいか。失格したつもりの人間が本當の人間の正體を具へてゐて、失格してゐないつもりの人間が人間の假裝であるかも知れない。

山岸外史「リアリズムと太宰の文學」(「暖流」第四号、昭和二十三年十月一日發行)には、つぎのように記されてゐる。

だが、こうした時代の背景や、彼の良心の弦きがなければ、彼の「自嘲」や「お道化」や「厭世思想」の實體をつかむことはできないのである。お道化は、弱い性格を基調にしているけれども、また、已むに

やまれなかつた良心の抗辯だからである。彼のユーモアさへ、また、こういうところにおこつてゐるのである。／（こうした状況を、彼は、じつに確手とした才能と精神力で、彼の最後を飾つてゐる作品「人間失格」のなかで、モデルを變化させながらその眞實を告白していることが、僕には、よくみえるのである。人間失格という、彼の言葉さえ、文字どおりの良心の吐露であることも、僕には解るのである。）／（略）／太宰の文學は、こうして、人間への愛と疑惑と、天性の卑屈さと、信念の缺除と戦いながら、多少は、宗教の世界に入りはじめ、そして、献身という宗教的斷末魔をもつて終つたのである。だが、彼は、たしかに、告白に終始し、告白をもつて終つたのである。／そういう意味で、彼の「人間失格」の悲劇が、その人間という言葉の深さが、飽くまでも叡智に満ち、飽くまでも行爲力に満ち、飽くまでも英雄的で、飽くまでも信念のつよい「そうした人間」からの失格であつたことを疑うものはあるまい。

亀島貞夫「池水は濁りに濁り」（『近代文学』第二十六号、昭和二十三年十月一日発行）には、つぎのように記されている。

然し同時にわれわれはこのような誤りが生じた原因をやはり太宰自身・彼の文學及びそれ以上もつと直接に太宰理解者を自任し一般にもそれが通用しそうな人々の側に發見しなければならぬだろう。それは例えばあの事件の直後に出了『週刊朝日』（七月四日號）に殆んど全紙面をさいて掲載された山崎富榮の日記がそうであらう。これについては臼井吉見が『讀書新聞』（六月三十日附）の『人間失格』をめぐつて」と題した小文の最後で言つてゐる。「彼女自身の詳しい日記が

あるというがたといそれが發表されることがあつても、おそらく『人間失格』の眞實とは遠いものであらうと思う。彼女は彼女なりに太宰を理解したにちがいないからである」と云うふうに言つてゐる。そしてこの臼井の言う「彼女なり」の太宰理解がどんなものであつたか、も一つ言えば彼女の太宰における位置がどのようなものであり、どのようなものに過ぎなかつたかを臼井は彼の「太宰治論」（『展望』八月號）の中で一層丁寧に説明してゐる。更にそれは臼井以上に個人的に太宰と親しかつた、その意味では臼井以上に具體的にそれを承知してゐると思える野平健一の「如是我聞と太宰治」（『新潮』六月號）が殆んど感情的と言へる程なアクセントをつけて臼井の言葉を裏うちしてゐる。それは例えば「盲目の追ひ打ち」とか「傍若無人」とか「妙な女」とか云う彼女を現はす言葉と共に「おれの女房は、やつぱり氣品があるね。このひととは、ちがふな」と云う彼女を前にしての太宰自身の言葉を挿入することによつてそうなのである。そしてもしこれらの言葉のすべてが野平の個人的好惡の感情からした歪曲であつたとしても同じ文章の中にある熱海から上京して來た太宰が告げたと云う野平の言う「大事な笑ひ話」はそれがそのまゝ、「人間失格」（第三回）に出て來ることと關聯して、又野平がそれを書いた時には『人間失格』を見てなかつたことから思ひあわせて事實であつたと見做さざるを得ないであらう。とすれば臼井の言う「部分的には」「自分の魂を分ち與へてゐる」『斜陽』の女主人公が美しいかたちでデフォルメされた太田靜子であるなら『眉山』の女主人公は滑稽なかたちでデフォルメされた山崎富榮であつたとも言えるだらう。／いや、このやうな詮索

を繰り返すまでもなく彼女の日記自身が最も明白にこれをさし示しているということを言えば済むことであるのだが。

船山馨「無神救済—太宰治について—」(「不同調」第二卷第十一号、せて二十三年十一月一日発行)には、つぎのように記されている。

しかし、ここで、問題は生きてゐるわれわれに落ちかかつてくる。

岩上順一氏が國際タイムスの「中間派の迷ひ」と題する文章のなかで「戦後急速に盛り上つた民主勢力とその成長をはばまうとする反動勢力の間にあつて、民主側への踏切もつかず、それかと云つて反動にくわけにもいかないとところに良心的なインテリゲンツアの迷ひがある」と太宰の死因について書いてゐるが、ある人間が民主(民主々義にもいろいろあるが)か反動(したがつて反動といふ言葉にも随分多様の意味が含まれてゐる筈だ)か、どちらかの社會思想のなかに截然と分類されることによつて、一切の人間の苦惱がたちどころに解決するものならば、はじめからこの作家に苦惱などはあり得ない。「マルクスの經濟學の講義を受けました。しかし、自分には、それはわかり切つてゐる事のやうに思はれました。それは、さうに違ひないだらうけれども、人間の心には、もつとわけのわからない、おそろしいものがある。怒、と云つても云ひたりない、ヴァニテイ、と云つても、云ひたりない、色と怒、とかう二つ並べても、云ひたりない、何だか自分にもわからぬが、人間の世の底に、經濟だけでない、へんに怪談じみたものがあるやうな氣がして、その怪談におびえ切つてゐる自分には、所謂唯物論を、水の低きに流れるやうに自然に肯定しながらも、しかし、それによつて、人間に對する恐怖から開放せられ、青葉に向

つて眼をひらき、希望のよろこびを感じるなどといふ事は出来ないのでした。」(人間失格)／かういふやうな人間にとつては、社會や經濟の機構の變革だけではどうにも刃先の届かない、人間存在の根柢に根を張つてゐる負ひ目が問題なのであり、つねにそれと對決しなければならぬのである。「地下運動の本來の目的よりも、その運動の肌が自分に合つた感じだ」といふのは、そのやうな存在の深淵からの負ひ目が、地下運動といふ日蔭の情緒を呼び求めてゐることである。太宰治にとつては、この場合も、問題は地下にあるのであつて運動にあるのではない。

山沢種樹「文壇録音長篇小説一九四八年」(「東北文学」第三卷第十二号、昭和二十三年十二月一日発行)には、つぎのように記されている。

人間失格／上林 「人間失格」は太宰文學に新しくつけ加えるほどのものはないけれど、とにかく太宰文學の總決算だということを言われましたが、そういう感じを受ける作品じやないかな。從來いろいろ書いて來たことを締めくくつたやうな感じで、芥川さんが最後に書かれた「或阿呆の一生」というのにあたるんじゃないでしょうか。(群像九月號合評會)／太宰治の最後の長篇「人間失格」を、白鳥の歌であつたとして、芥川龍之介の「或阿呆の一生」に對應させようとするのは俗説である。「或阿呆の一生」は、芥川龍之介の全生涯、その全生涯に互る神經を、一篇の中に充満させ、集大成したもので、嘗に芥川の代表作品であるばかりではなく、日本文學に不朽の一篇を残した傑作であると思ふ。さういふ見地から、太宰の作品の中で「或阿呆の

「一生」を見出さうとするならば、これは一つの太宰治論の結論となるのだが、著作集「晩年」一巻を挙げるに若くものはない。蓋し、太宰治とは、處女作が遺作であるといふ。逆コースを辿った稀有な作家であつたのだ。／さて「人間失格」は自己の死を予知し、或ひは死の必至を思ひつゝ執筆されたものではあるだらうが、必ずしも彼の文學の總決算といふが如きものとも言ひ切れない。そのモチーフが、「斜陽」で「女」を描いたから、「人間失格」では「男」を描きたい。意識せざるドン・ファンを描くといふところにあつたのは、疑ひを容れない。太宰は「ヴィヨンの妻」あたりで多年の蓄積を放出しつくしたといふ感じであつた。（この意味でも、私は戦後の太宰の小説中、「ヴィヨンの妻」を第一等の作品としてゐる）「斜陽」は周知の通り、主題を他から與へられたもの。しかし、「斜陽」に於ける太宰独自のレトリックの美には眩惑されるものがある。かうして、ある行き詰りに來てゐた時に、これを打破しようとして意氣込だけでも凄じいものがあつたのが「人間失格」ではなかつたらうか。しかし既に蓄積されたものはない。そこで、第一回は過去の追憶であり、素朴な問題であつた。（この部分は特に好評のやうである）第一回にはフィクションを導入して、青年時代を戯畫化した。漫畫家とは思ひつきの、哀れ深い職業であつた。第三回に至ると既に枯渇は甚だしく、ごく近い身邊の現象をたよりにするより仕方がなかつた。即ち、第三回のキイポイントが悲劇名詞、喜劇名詞からはじまり、アンティニウム、シノリウムの遊びの中に、罪と罰と神との、この三つのものもつれをほどいて、夫々に對決させようとする終結に來たのである。睡眠劑と下劑をまちがへて買

つて來たといふ「事實」さへも、書き入れねばならぬ衰弱さではあつた。／上述の意味で、私は「人間失格」を余り高くは買はない。況んや、「或阿呆の一生」と比較するが如き俗説に組みすることは、到底できない。

〔付記〕初出誌には、「はしがき」23頁、24頁、「第一の手記」24頁、31頁、「第二の手記」31頁、59頁、と掲載。末尾に「（第二の手記、完）」とある。初出誌「編輯後記」には、つぎのような記述が見られる。

太宰治氏の『人間失格』は向ふ三ヶ月連載することになつてゐる。『冬の火花』、『ヴィヨンの妻』とつねに自信作をのみ本誌に寄せられた作者が、決然世に問ふ本篇は、太宰文學のおそらく一ばん高い峯を示すものになるだらうと信ずる。敗戦後の現実のなかにあつてこの作家の文學がどのやうな、なまなましい光芒を放つてゐるかは誰でも知つてゐるが、本篇ほど自己を吐露しつくしたことはなかつた。

初出誌は、「昭和二十三年五月廿五日印刷」「編輯者白井吉見」「発行者古田晃」「発行所／東京都文京区台町九／筑摩書房」で、同誌「小説」欄には、太宰治「人間失格」、宮本百合子「道標（第九回）」が掲げられてゐる。なお、初出誌表紙には「小説 人間失格 太宰治」とあり、目次には「小説人間失格……太宰治」とある。

如是我聞（三）・新潮・六月号、第四十五卷第六号・昭和二十三年六月一日発行・2頁5頁

〔付記〕初出誌の斎藤十一の「編集後記」には、つぎのように記されている。

太宰治氏が亡くなつた。われわれは、二十世紀の旗手を失つた。氏

の文學が、たうてい疊の上では死ぬぬ文學であることは早くから多くの人々の一致した意見であつたが、それにしても餘りに早過ぎたといふ感が深い。文壇としては芥川龍之介以來の事件であるが、あらゆる意味で若い人達のホープであつた太宰氏の死は單に文壇のみならず、多くの青年達にとつて手痛い打撃であるに違ひない。自らの文學に死を賭し、偶像破壊の旗手としてそのユニークな天才を飛躍させてゐた氏の自ら選んだ死の道は悲愴である。／豊島與志雄氏は弔辭の最後において、／「僕は告別は言はない。太宰君、握手しよう」と讀まれたが、太宰氏の文學は果して誰の手によつてつがれるのであらうか。／池水は濁りににがり藤波の／影もうつらず雨降りしきる／太宰氏はこの伊藤左千夫の歌を、最後の日に色紙に記して遺されたが、私はこの歌を通して氏の心境を偲び悲しみを新にする。／「如是我聞と太宰治」を書いた野平健一君は本誌の編集部員であるが、同君は生前太宰氏に最も愛顧を蒙つた人で、「斜陽も野平君のために書いた」と太宰氏も言つてゐたほどである。日頃の言動のほうが、その作品よりもはるかに面白い場合の多い太宰氏にあつては、このやうな身邊的な記録も、氏を知るためにはかなり重要な意味を持つと思はれたので、死體搜索や葬儀のため、殆ど連日徹夜を続ける野平君を激勵して書いてもらった。／「如是我聞」は太宰氏としては殆どはじめて書いたエッセーであり、必死のプロテストとして各方面に非常な反響を呼んでゐるが、これがいかに多くの犠牲を覺悟して書かれたものであるか、野平君の一文がよくその間の事情を物語つてゐると思ふ。なほ本稿の續篇（四）は既に脱稿してあるので、これに關するノートと共に近く誌上に發表

するつもりである。／いろいろの方々に追悼を書いていたゞかうと思つたが、すでにメ切後のため、本號には亀井勝一郎氏の思ひ出と石坂洋次郎氏の追悼しか間に合はなかつた。

初出誌は、「昭和廿三年五月廿八日印刷納本」「編集兼発行者斎藤十」／「発行所／東京都新宿区矢来町七一／株式会社新潮社」で、同誌の表紙には「如是我聞（遺稿）…太宰治、目次には「如是我聞(三)」とある。なお、同誌には、太宰治「如是我聞(三)」、土井虎賀寿「青春の費消と屈辱の歴史」、塩尻公明「或る遺書について」、辰野隆「良い学生と悪い学生」、小泉信三「学問のすゝめ」の諸稿とともに、石坂洋次郎「太宰治の死」、亀井勝一郎「太宰治の思ひ出」、野平健一「如是我聞と太宰治」の諸稿が掲げられている。

第二巻後記・悪い仲間井伏鱒二選集第二巻・筑摩書房・昭和二十三年六月二十日発行・315頁～322頁

『如是我聞』（新潮社、昭和二十三年十一月十日発行）に、『井伏鱒二選集』後序―井伏鱒二のことの題で、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日発行）に、『井伏鱒二選集』後記の題で、全文収載された。

〔付記〕『悪い仲間井伏鱒二選集第二巻』は、『昭和二十三年六月十五日印刷』『著者井伏鱒二』『発行者古田晃／東京都文京区台町九』『印刷者中内佐光／東京都千代田区飯田町一ノ二三』『発行所株式会社筑摩書房／東京都文京区台町九』で、同書には、『丹下氏邸』（51～32頁）、「悪い仲間」（33～50頁）、「晩春」（51～58頁）、「女人來訪」（59～90頁）、

「喪章のついてゐる心懷」(91-113頁)、「掏摸の棧三郎」(114-131頁)、「使徒アンデレの手紙」(132-144頁)、「冷凍人間」(145-196頁)、「青ヶ島大概記」(197-235頁)、「岩田君のクロ」(236-251頁)、「槌ツア」と「九郎ツアン」は喧嘩して私は用語について煩悶すること」(252-263頁)、「湯島風俗」(264-290頁)、「中島の柿の木」(291-313頁)の諸稿が収載されている。

グッド・バイ／變心一・朝日新聞・第二三七八号・昭和二十三年六月二十一日発行・2面

「朝日評論」第三卷第七号(昭和二十三年七月一日発行)に、全文収載された。

「人間失格」(筑摩書房、昭和二十三年七月二十五日発行)に、全文収載された。

「グッド・バイ」(八雲書店、昭和二十四年六月十五日発行)に、全文収載された。

『太宰治全集第十五卷人間失格』(八雲書店、昭和二十四年十二月十日発行)に、全文収載された。

〔付記〕初出紙・まえがきには、

太宰治氏が本紙に連載予定の小説「グッド・バイ」を執筆しはじめたのは五月のはじめで、この小説が自分の価値を決定するものだといっていた。こゝに掲載するのは第一回で、以下十三回までは朝日評論七月号に収録する。

とあり、吉岡堅二の「さしえ(文も)」と題する文章には、

太宰氏とはこんど連載小説についてそのさしえを描くため度々打合

せてきた。よく酒をのみ、酔うと同じ事を五度も六度もクドクドと話す面白い男だった。買物かご等をさげて市場で自分で魚などを買ってきて私達をもてなしてくれたりした。

とある。なお、同紙「学芸」欄には、豊島与志雄「太宰文学」、中野好夫「如是我観」の諸稿が掲げられている。

解説・豊島与志雄著『高尾ざんげ(新潮文庫)』・新潮社・昭和二十三年六月三十日発行・258-260頁

『如是我聞』(新潮社、昭和二十三年十一月十日発行)に、「高尾ざんげ」後序「豊島与志雄のこと」の題で、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦(近代文庫23)』(創芸社、昭和二十七年七月一日発行)に、「豊島与志雄著『高尾ざんげ』解説」の題で、全文収載された。

〔同時代評〕豊島与志雄「太宰治の癩癪」(「群像」第三卷第九号、昭和二十三年九月一日発行)には、つぎのように記されている。

「……この頃、教養人は、強くならなければならない、と私は思ふようになった。いはゆる車夫馬丁にたいしても、バカヤラウと言へるくらゐに、私はなりたいたいと思つてゐる。できるかどうか。ひとから先生と言はただけでも、ひどく狼狽する私たち、そのことが、たゞ永遠の憧れに終るかも知れないが。——教養人といふものは、どうしてこんな頼りないものなのだらう。ヴァイタリティーといふものがまったく、全然ないのなもの。」／これは、私の或る著者の解説として、太宰治が最近書いた文章の一節である。随つて、この私に關するものであるが、實は、太宰自身の感懷の一端だと、文意からして見られる。

／茲に言ふ教養人とは、知識豊かで作法正しい文化人の謂では勿論ない。或る種の嫉けを身につけて、慎重深く、羞恥心強く、心ばえやさしく生れついた人のことだ。——さういう風に生れついた人だと、私は太宰を観る。而も彼の生家は、舊家であり大家である。彼のうちには、古くからの血が凝集し淀んでゐたらう。その上、早くから健康を害し、麻薬にも親しんだ。體軀は頑丈で、しんが强かつたやうだが、最後まで肺の宿痼は癒えず、藥劑を離さなかつた。／自分自身が頼りないのだ。文學をやりかけたからには、どうしてやりかけたかは神のみぞ知る、ひたむきにやり遂げるより外はない。捨身の途だ。彼は「新約書」を最も愛讀し、どういふ風に讀んだかは分らないが、捨身の心構へを知つてゐた。だが、生身の人間を取扱ふ文學にあつては、肉體を殺して魂を救うことには、憂苦が伴ふ。憂苦の底から、人間としての愛情の手を彼は差伸べる。

〔付記〕『高尾さんげ（新潮文庫）』は、『昭和二十三年六月二十六日印刷』

「著者豊島与志雄」発行者／東京都新宿区矢来町七一／佐藤義夫「発行所／東京都新宿区矢来町七一／株式会社新潮社」で、同書には、「狐火」（5～17頁）、「たぬき」（19～27頁）、「童貞」（29～45頁）、「千代次の驚き」（47～63頁）、「道化役」（65～102頁）、「女と帽子」（103～133頁）、「潮風」（135～161頁）、「立札」（163～184頁）、「畫舫」（185～208頁）、「高尾さんげ」（209～231頁）、「水甕」（233～257頁）の諸篇が収載されている。

人間失格（第二回）・展望・七月号、第三十一号・昭和二十三年七月一日発行・38～52頁・「小説」欄

翻印状況については、以下、「人間失格（第三回）」まで、「人間失格（第

一回）」の項を参照のこと。

〔同時代評〕以下、「人間失格（第三回）」まで、「人間失格（第一回）」の項を参照のこと。

〔付記〕初出誌には、「第三の手記」の「一」を掲載。末尾に「（未完）」とある。初出誌表紙には「小説人間失格（第二回）」、目次には「小説人間失格」とある。また、初出誌「編輯後記」には、つぎのように記されている。

このごろの雑誌を見てゐると、六十四頁が不自然でもなく、窮屈でもなく、この小さな枠のなかに、しごく居心地よささうにおさまつてゐるといふ氣がする。かういふ枠を内側からめりめりとおし破つてはみ出るやうな強烈な個性的な思想も作品も編輯意欲も見られず、雑誌といふものは元來六十四頁が最適ではないかといふやうな錯覺さへ與へかねないほどである。こんなことをいひ出したからとて、本誌だけは、かういふものどちがつてゐるなどとうぬばれてゐるよでは更々ない。だが、本誌が六十四頁といふ枠のなかで、貰つたものは仲よくわけ合つてといふ具合に、行儀よく體裁のいい編輯ができないのだから止むをえない。たとへば、前號は四篇しか載せられなかつたが、これが四篇とも連載であり本號はちやうど半分が連載である。かういふ飢餓時代だからこそ何とか力のあるものを生み出して行かうと考へれば、どうやりくりしてみたところで、連載のかたちになるより手はないのである。分量が絶対條件ではないにしても、たとへば一篇の小説に二十枚やせいぜい三十枚をあてがつてゐて一體どんなものが生れると思つてゐるのか。連載で編輯がイイジイなどと阿呆な聲も耳にする

が、本誌の連載はさまざまの世俗的不利などは百も承知の上で、なほかつ雑誌のもつ責任上止むをえないところから來てゐるのであつて、これはわれわれに強制されてゐる六十四頁の枠が絶対に不自然であり、我慢のならぬものであることの表明そのものでもある。變則なものを變則なものとし、我慢からぬことを我慢ならぬこととするからはじめないかぎり、どこに文化の問題などがありえようか。六十四頁に器用におさまる編輯がイイジイの反對のものならば、僕らはどこまでも頑固にイイジイでありたいと思つてゐる。なぜならたとへば本號連載の二篇の小説の如き、日本文學史に大きく書きこまれる作品であることを固く信じてゐるからである。

なお、初出誌は、「昭和二十三年六月廿五日印刷」「編輯者白井吉見」「発行者古田晃」「発行所／東京都文京区台町九／筑摩書房」で、同誌「小説」欄には、太宰治「人間失格」、宮本百合子「道標（第十回）」が掲載されている。

グッド・バイ／作者の言葉・朝日評論・七月号、第三卷第七号・昭和二十三年七月一日発行・附1頁

『人間失格』（筑摩書房、昭和二十三年七月二十五日発行）に、全文収載された。

『グッド・バイ』（八雲書店、昭和二十四年六月十五日発行）に、全文収載された。

『太宰治全集第十五卷人間失格』（八雲書店、昭和二十四年十二月十日発行）に、全文収載された。

〔付記〕新仮名遣。初出誌は、「昭和二十三年六月二十日印刷」「編集兼

発行兼印刷人春海鉄男」「発行所／東京都千代田区有楽町二ノ三／株式会社朝日新聞社」である。

グッド・バイ・朝日評論・七月号、第三卷第七号・昭和二十三年七月一日発行・附1～附14頁

翻印状況については、「グッド・バイ／作者の言葉」の項を参照のこと。〔同時代評〕足「スクーター」（『新大阪』昭和二十三年七月十五日発行）には、つぎのように記されている。

丹羽文雄は「文学界」七月号で新聞小説に新型を出すことのむつかしさを述べ、太宰治は新手を打てる一方のホープだが、失敗する点も成功する点も今からわかつてゐるといつてゐるのはおもしろい。絶作「グッド・バイ」（朝日評論七月号）はわずか十三回分ながら明らかに失敗作だ。作者がねらつたスピーディとユーモラスな点では一応成功しているようにみえるが、実はこの作もそのネライの故に失敗しているのだ。太宰文学の近代性は作品と作者の距離がなくなり、そのユーモアもその場合にのみ新しさを持つものだ。／ところが「グッド・バイ」のように距離が開くとヘタな掛合漫才のようなヤボ臭い会話になつてしまふ。イキな太宰とは思えない。「人間失格」を知つてゐるものなら顔をそむけたくなるだろう。太宰はこの「グッド・バイ」に全力を賭けたようにいわれながら、所詮、かれの作品としては二級品以下に終るべきものだろう。まことに新聞小説という形式は厄介なものだ。だが罪はそれのみに帰すべき事柄ではない。

無署名「小説案内 グッド・バイ太宰治」（『新夕刊』第八八二号、昭和二十三年七月十六日発行）には、つぎのように記されている。

「朝日」に書いていた絶筆で、構想に據れば十人の情婦と機嫌よく、或いは機嫌悪く「グッド・バイ」する経過を描こうとしたものだと言ふ。小説の主人公は雑誌編輯長、十人の中の手始めとして先ず美容院経営の女と別れようとして、そのタマに、平常はモンペ着で薄汚く生活しているが、洗つてチャンとすれば素晴らしく美人となるヤミ屋商売の女を味方に付け、これを「美しき妻」として美容院へ客にやるので、相手の「女」がその美人に気負けして自分の關係を諦めるという筋。このヤミ屋の女がよく描けていて、次に手を切られようとする第二の「女」が、顔を出したばかりで絶筆になつてゐる。―朝日評論七月号

林逸馬「太宰治小論」(九州文学)第一〇五号、昭和二十三年八月一日発行)には、つぎのように記されている。

彼の最初の作品集の題名が『晩年』である。人生の門出に於いて、既に『たそがれ』のほのぐらさを標よはせてゐるではないか。最後の作品が『人間失格』であり、未定稿が『グッド・バイ』である。人間を失格し、此の世にサヨナラすることをこれより單的に語つてゐるものがあらうか?／＼それにも拘らず、私は、『晩年』を初めにもつて來たと云ふことにも、『グッド・バイ』と言ふ言葉にも、同時にハツタリとクスグリと俗臭とユーモアを感じる。／＼何故であらうか?

井伏鱒二「おいしい人太宰君のこと」(新文学)第五卷第八号、昭和二十三年八月一日発行)には、つぎのように記されている。

太宰君と最後まで親密にしてゐた或る一人が、お葬式がすんでから私にこんなことを云つた。「太宰さんはグッドバイの筋書きを私に話

して下さいました。或る一人の男がいろんな女と交渉を斷つて、行きつけの店にも仕事部屋にも行かないことにして生活を一新する。行きづまりの生活にグッドバイする。今まで親切にしてくれた君たち夫妻にもグッドバイする。しかし氣を悪くしてくれるなよ。小説の筋書はそのつもりだが、事實、僕はさうしたいのだと仰つてゐました。」大體においてそんな話であつた。しかしこの話の場合は作品の復案が、生活は無論のこと作品の先行をなし得なかつた。グッドバイは中絶のままに終り、太宰君は四十歳で自分の生涯を閉ぢた。おしくてたまらない。痛恨事である。五十になつても六十になつても小説は書ける筈だ。よしんば一時的に行きづまりのときがあつても恥かしくない筈だ。書くために生きると太宰君は断言したことがある。また、小説のために入院してくれと私が頼んだとき、彼は別室にはいつて啼泣し、やがて入院する決意をしてくれたこともある。

有村士郎「太宰治の情死について」(時論)第三卷第八号、昭和二十三年八月一日発行)には、つぎのように記されている。

そして『人間失格』でもう一度自分をずた／＼にしておいてそのまゝ、『グッド・バイ』その中で主人公の編集長がある文士に『女にほられて死ぬというのは、これは悲劇ぢやない。喜劇だ。いやファースというものだ。滑稽の極みだね。誰も同情しない』とやられるくだりがある。『グッド・バイ』がその先どうなつていくか。プロットだけでは想像できない。誰の同情もうけず、コメディと笑はれても、太宰自身は苦しさ、淋しさの時代を通つてもう悲しさの時代にきている。ゆとりをの全くないぎり／＼のところまできている。／＼現實の悲しさから逃

避するか、現實の悲しさの中へとび込んでいくか、どちらへも行けないと判つたとき残された道は死しかなかったかも知れない。／（略）

／——『サツチヤンを『グッド・バイ』のさし繪モデルになつてもらつたら』といったら、太宰は／『駄目ですよ。こんなの、サツチヤンなんか美人のうちにやりやしない』と一言のもとで否定した。妻になら云える言葉かも知れないが、愛人である彼女にはひどすぎないか——と末常さんがサツチヤンに同情したこともあつた。『グッド・バイ』が始まる前、その構想のことで、例え話にサツチヤンと別れるにはといひかけた太宰氏が、サツチヤンが余りに眞剣な顔をしたので、あわてて止めたやうなこともあつたという。／サツチヤンには、選ばれて現在あるといううれしさと、正式の太宰夫人でなく、又ならうとしてもなれない不安定な氣持が錯索していた。そして、サツチヤンのまだ知らないか、はつきり知らない太宰氏の愛人がいるという不安もまざる。優れた人を選ばれた苦しさの方が強くひびいてくるのだつた。不安のない世界——今まで何邊も遺書をかいて、實行しなかつた死への旅行。そこには永久の愛の勝利があり、永遠の恍惚がある。／それはもう『斜陽』にも『井原』にも妨げられないのだからサツチヤンの方から『グッド・バイ』を贈るのだ。この點からサツチヤンは更に一歩死へ前進していた。太宰氏も。サツチヤンと違ふ道を、同じ死に向つて一歩前進。そして六月十三日。

高山毅「太宰文学と死」（『文芸首都』第十六卷第八号、昭和二十三年八月一日發行）には、つぎのように記されている。

太宰文学は、かくて多くの讀者から迎えられるに至つた。『朝日新聞』

が氏に新聞小説の執筆を依頼したことは、その間の消息を象徴的に裏書きするものといえよう。太宰氏としてもこの申出には非常に上機嫌で、大へんな張切り方であつた。ぼくは太宰氏に一度會つておきたいと思つて、三月上旬の或る日、午後であつたが、太宰氏を訪問した。例の「千草」というおでん屋に行つたら、そこからすぐ筋向いの、山崎富榮さんの二階の部屋に案内された。「如是我聞」の第一回が書けなくて前夜、太宰氏の宅で「新潮」の記者に筆記させて七枚まで出来、あとが行きずまり、朝からここへ来て酒を飲んでるところであつた。

「新潮」の記者はじめ、四、五人の雑誌記者が氏をとりまいて、酒の相手をしてゐた。勢いばくもその一人に加えられたが、酒のはいつてゐる太宰氏はなかなかの饒舌家といつてよかつた。その部屋へはいつた瞬間、女の人がいゐて、（それが富榮さんだつたのだが）ぼくにはどういつた種類の人かわかりかねた。太宰氏の身邊に非常に氣をつかつてゐて時に太宰氏の腕に注射を打ち、太宰氏の手の動き具合で煙草に火をつけて、その手にもつて行き、また太宰氏の盃を受けて飲む——といつた式で、家政婦にしてはなかなか馴れなれしいし、おでん屋の女將にしてはちがうし、ぼくには遂にわからずじまいであつた。新聞では富榮さんのことを美人だなどと書いたが、ぼくの受けた印象は、そうでもなかつた。何處か疲れた、ヤツレたといった感じであつた。／しかし、太宰氏は元氣で、「如是我聞」は一年連載の豫定であること、「朝日新聞」の小説は、出来たら全部書いて一度にわたしてしまいたい、と語り、「太宰治全集」は八雲書店の方で勝手に十六巻ときめてしまつたが、これは自分が今年中に死ぬとみての話で實に怪しからん、

だからこれからウンと書いて倍ぐらいの巻數にしてやるんだ、ともいつた。——ぼくにはこの時の印象が強かつたので、「太宰氏家出か」という新聞の報道をみても、何か嘘のような氣がしてならなかつた。

一種の狂言でないかとさえ思われた。／（略）／遺稿となつた「グッド・バイ」にしても、行きずまりといった感じは全くない。新聞小説といった形式と制約に引きずられて、描寫が簡單になつてゐることは事實だが、筆力が衰えているとは別段思えない。これは十人の女を持つてゐる主人公が、次ぎ／＼に女とわかれて行く、その離別の百態を描こうというのが狙いだが、最後に自分の細君から逆に「グッド・バイ」されるといふ落ちが用意されていた。全體では八十回にもなるもので、そのうち十三回分しか書いてない。一人の女にアツケなくわかれ、次の女とどうしてわかれるか、その工作中のところで未定となつてしまつたが、作品自體は相當面白くなりそうな雰圍氣を既に出している。「小説が書けなくなつた。遠い所へ行つてしまいたい」と太宰氏自ら書いたとしてもだからぼくはこれをそのまゝ、鵜呑みにすることは出来ない。ゴマ化されてはならない。客觀的には筆力の衰え、作家的行きずまりというものは、うかがえないのである。これを得たりかしこしと、恰も太宰氏の死を豫感してゐたように、その感のよさをヒケらかす作家、評論家の言説ほど信用のおけぬものはない。借問するが、これらの諸君は、太宰氏の死の以前に本當に、腹の底からそう感じたのか。いや、死んであとからのものつもらしい解説に過ぎぬのではないか。それが合理的な解釋のようでいて、そうでないことは、本人自身、トツクリ考えてみれば、わかつてくるにちがいない。

北鬼助「現代の長悼——太宰治を悼む」(「人間喜劇」第二号、昭和二十三年八月一日發行)には、つぎのように記されている。

三回目、私は、たしか朝日の同僚と一緒に訪ねた。二月の二十日前後のことであつたように思う。千草から、富榮さんの部屋というコオスであつた。その日は、小説の話を、ほぼ確約した。それから、例によつて、炬燵を圍み、酒を飲んで、大いに談笑した。歸り際に、——小説の構想は……と、こころみに問うと、／＼グッド・バイ、一人の男が、戦後、過去の一切のものと、權威、權力、宗教、道德、習慣、生活、女……と、訣別してゆく。／＼一切のものを、次々と振り捨てて、生きてゆく……。／＼ところが、／＼最後に、自分の振り捨ててきたものの總量に、つまり現實に、彼自身が振り捨てられる……。／＼つまり、グッド・バイというわけさ……。／＼という返事であつた。それを聞いた瞬間、私はちよつとはつとした。が、しかし、それはむしろ、テンポの早そうな、見事なその逆説のプロットの立て方のあざやかさにで、もちろん、その書き手の側にあるはずの彼自身の身の上に不吉な豫感をおき、ながくそれにこだわるようなことはなかつた。私は、むしろ、そういう慄然たる主題の、巧者な捌き手としての方の彼に、より大きな關心と信頼を感じてゐたのだつた。／＼それを、いわば置き土産に、それから間もなく、私は、朝日を辭めた。新しい仕事に忙殺されて、何べんも彼に會いたく思いながら、なかなか果せず、グッド・バイを始めたということも、人の噂さに聞いたのであつたが、ついに機を得て、たしか五月の二十六日の午後、久々に千草を訪ねた。富榮さんと一緒に、そこにいて、ちよつと土井虎賀壽氏が來合わせて

いた。二人は、初面會のようであつた。土井氏は、その日待ち人があるというので、ほどなく中座した。

伊馬春部「死の扈從——太宰治の愛情の行方」(「婦人文庫」第三卷第九号「特集愛と死について」昭和二十三年十月一日発行)には、つぎのように記されている。

K君——／お手紙拝見。日を経るにつれ傷痕いよいよ新なるものあるは、小生とて同様。ご返事になるかどうかわかりませんが、ともあれ書いてみます。ほんとに太宰はなぜ死んだのでせうか：絶筆として遺された、十三回分の「グッド・バイ」を讀まれた今となつては、なほのこと痛切に：／たしかに彼は、今度の朝日新聞の連載で、一大轉機をしなければならぬ時機に遭遇してゐました。彼の作品のこの頃の自己の語りぶりを。あれでは生きてゐなくななるのも、當り前ではないでせうか。「父」しかりです。「ヴィヨンの妻」しかりです。「櫻桃」また然りです。さうしてまた「斜陽」にさへも。／彼はかういふ自己に、一應、訣別を告げたかつたのではないかと、私は思ふのです。その意味の、その總決算の意味の「人間失格」であり、「グッド・バイ」だつたのです。もう一作、其誌に渡してある原稿があるといふことです。／なんといふ悲しいことか。それは「家庭の幸福」といふ題ださうです。／K君——／その「グッド・バイ」を十三回だけで、死に急いだといふのは、彼に肉體的の無理があつたからだとは言ひたいのです。爲事をしすぎました。すでに強度の精神衰弱だつたに違ひありません。それを覺醒されるがための酒——さうしてそのため更に酷使されることになる精神と肉體、そのふらふら状態に作用してしまつた

女の力：／彼女はたしかに「グッド・バイ」の構想——九人の女に次々と訣別を告げてまはるあのプロットを聞かされてゐたにちがひありません。そのために彼女もあわて、獨占慾にかられ、彼が日ごろの口ぐせである「死」へと誘つてしまつたのではないでせうか。／彼女——山崎富榮さん……といふのも今度はじめて知つた名まへ、はじめは看護婦と紹介され、のちに「さつちゃん」といふ呼び名のあることを知りました——の献身的な勤めぶりといふものは、それは見上げたものでした。太宰の爲事とからだの上への心くばりは、それは大したものでした。／しかし同時に、憎んでもいい、といふのは、何といふ矛盾でせう。全く彼女がもう一步その忠實を發揮して、太宰を生き抜かせるための努力をしてくれたら……とその點では憎みたくなくて來るのです。せめて「グッド・バイ」をもう少し書きつゞけさせてくれたら、さういふ舵をとつてくれてゐたら、と、新聞小説でありながら、一流の高踏派としての構へと氣品とを持ち、しかも二千萬の讀者を満足せしむるに足る新鮮な奇驕さを用意したこの「グッド・バイ」を讀みながら、このやうに私は痛恨するのです。

亀島貞夫「池水は濁りに濁り」(「近代文学」第二十六号、昭和二十三年十月一日発行)には、つぎのように記されている。

同じようなことがその日記と同時に『週間朝日』にのつた末常卓郎の「太宰治のこと」についても、絶筆「グッド・バイ」をのせた『朝日評論』の「グッド・バイのこと」についても言えるようだ。この二つの香水線香のうにげびた甘つたるさをもつ文章はその中で末常が「飲む方でも、語る方でも、初対面のその日から長い間の友達のやう

な親しいものになったのだつた」と手前勝手な判断を下すことによつて、又「太宰治よ。君はまったくひどい奴だ。(中略)こんなことを書いているのは君は何處かで、にやにやして見てやがるんだらう。まったく、いやあな奴だよ君は」と「にやにや」なぞ決してしもしなかつたし、してもいいだろう太宰に見當はずれに呼びかけることによつて、彼と太宰との間柄について誤解を招き易い、と云うより招き寄せたがつているふうなところさえ見られなくもない。末常などがこのような言葉で語ることこそ「まったくひどい」「いやあな」「間の抜けしたもの」であるか、このようなものでもまかりまちがえば太宰についての一般の誤解を招きよせる働きを幾分はするやうにも思われる。それは例えば彼が「大新聞の小説欄」に「まだ手を觸れられずにいた年増の新人」としての太宰を「登場させたい」と思い依頼することを述べた部分に、「老婆心のきらいはあつたけれど、この小説の讀者は、僅かの發行部数しか持たぬ文藝雑誌の文學青年ではなく、三百五十萬の發行部数を持つ新聞の、二千萬に達する讀者であることを私は話した。彼は笑つた。『おどかされるなあ』といつと不敵に笑つたものであつた。」とあるところなぞがそうである。然し「三百五十萬の發行部数」や「二千萬に達する讀者」が末常にとつて同じ大きな・重さで太宰に受けとられたと云う野蠻な憶測の上に立つた「不敵」な笑ひなどがどれ程太宰から遠いものであるかは直接にしろ間接にしろ太宰を知る誰にも容易に分ることではないか。だからそんな末常が「『あなたは丙午でしょう』と、ずばり私の生れ歳をいつてのけ『そうに違いないんだ。ぼくはどういうものか丙午の生れの人には親しみが持て

るんです』」なぞと云う太宰の言葉を太宰の言葉がいつももつニュアンスをぬきにして思い出してはのほせ上つたり、「『朝日に書くのはこわいですよ』と」もう一度太宰に笑わせたり、「『毎週土曜日には必ず来て下さいよ。来て激勵してもらわないと、どうも元氣が出ないから』土曜日ごとの會合。彼はそれを非常に楽しみにしていたようである」と彼一流の憶測による太宰の「楽しみ」を作りあげたりしたとしても別段怪しむには足りないであろう。實際末常は彼自らも言うように「知つたかぶりして書いている」だけであるようだし、「なんにも知つてなんかいいやしない」ようだし、「あほう」で「ばかの骨頂」で「身のほど知らず」だと彼が自分に言いきかせているのも満更謙遜の言葉とも思えぬようだ。「おかしいか。おかしいければ笑え」と言われても太宰もそしてわれわれもうつかり笑いも出来ぬというものだ。

〔付記〕新坂名遣。初出誌の表紙には「絶筆『グッド・バイ』太宰治」とあるが、目次には記載なし。64頁のあと、附1に「グッド・バイ太宰治」と記し、「作者の言葉」を収載。附2から附14までに、「変心一」から「コールド・ウォー」までの本文を収載し、末尾に「(未完絶筆)」とあつて、そのあとに「太宰氏略歴」を掲載している。なお、附15・16には、末常卓郎の「グッド・バイのこと」と題する、つぎのような文章が掲げられている。

太宰治よ。君はまったくひどい奴だ。ぼくに「グッド・バイ」の後記などと言う、間の抜けたものを書かせるなんて、まったくひどい男だ。こんなことをさせるなら、一言ぐらいあいさつを、遺して行つてくれたつてよさそうなものだつた。それさえしなかつた君は、不屈千

万を通り越している。ばくが惨めに、こんなことを書いているのを君は何處かで、にやにやして見てやるんだろう。まったく、いやあな奴だよ君は。／朝日新聞に連載小説を書くことを太宰治に依頼したのは、この三月のはじめであつた。だれか新人を登場させたい、そんな要望から藤澤桓夫のあとに、彼を選んだのである。もちろん彼は、文壇的にはすでに名をなしていた作家であつたけれど、大新聞の小説欄からいえば、まだ手を觸れられずにいた年増の新人だつた。それだけにどれほど我々が彼に期待したかは分らないのである。我々だけではない。これを聞いた作家たちに與えた衝動も大きかつた。太宰が書くそうですね、といわれ、いゝ所に眼をつけたとも稱められた。當事者である私たちは、果してどんなものが出来るかと不安ではあつたが、内心いささか得意でもあつた。依頼するとき、老婆心のきらいはあつたけれど、この小説の讀者は、僅かの發行部數しか持たぬ文藝雜誌の文學青年ではなく、三百五十万の發行部數を持つ新聞の、二千万に達する讀者であることを私は話した。彼は笑つた。／「おどかさるなあ」／といつて、不敵に笑つたものであつた。／この小説「グッド・バイ」は、本社の依頼を受けてはじめて構想されたものではなく、當時すでに作家太宰の胎中を形をなしてうごめいており、やがて生れる子への名も用意されていたのである。流行作家として、常に先き先きのものを考へていることは、何の不思議でもない。だが今となつて、彼の死と結びつけて考へて見れば、新潮に「如是我聞」の斬り込みをやり、展望に「人間失格」を企て、さらに「グッド・バイ」の構想をからみつかせていた彼の胸中には、我々の豫感し得なかつた死の行進

が、ドドロ・ドドロの足音を響かせて、如實にはじまつていたのだ。／太宰がこれを書きはじめたのは、五月の十日ごろだつたらう。正確には、彼と死を共にした山崎富榮の日記を見れば判るかも知れぬ。彼が描こうとしたものは逆のドン・ファンであつた。十人ほどの女にほられてゐるみめ麗わしき男。これが次々と女に別れて行くのである。グッド・バイ、グッド・バイと。そして最後には、あわれグッド・バイしようなど、露思わなかつた自分の女房に、逆にグッド・バイされてしまふのだ。「人生足別離」と彼はいう。主人公なる雜誌記者は、もちろん太宰治自身と考へていゝ。彼は自分の容ぼうには相當の自信を持つていたし、多くの女にほられた。山崎富榮の日記にある太宰の言葉——（どうして）こう女に好かれるのかなあ。ちようどいゝらしいんだね。ばくは余り固くないし、場もちは上手だし——を見て、このことはよく判るのである。彼は現實にもこういう女と別れようとしていた。あの山崎富榮もその一人であつた。彼が仕事部屋を借りていた「千草」のお主婦の話によると、死ぬ少し前、太宰の方から別れ話を持ち出し、幾日かいざこざの日が續いた。だけど結局二人は別れ得なかつたのだ。別れるといへば、女は自殺してしまうという。ほかの女に太宰をとられるなら、暴力でも彼を奪いかえして見せるとおどす。太宰はもはやどうにも出来なかつたのである。小説の上では可能に思われる男女の別離が、彼が身をはめ込んだ現實の中では、たゞ一人の女とさえ、どうしても不可能だつたのである。「小説が書けなくなつた」という夫人あての遺書の中の言葉、眞實彼は小説の中に眞理探求の道を見失つてしまつたのであらう。／太宰治よ。まったく君は、

いやあな奴だ。ぼくは君の死因を、知ったかぶりして書いている。なんにも知つてなんかいやしないんだ。あほうだ。ばかの骨頂だ。身のほど知らずだ。ぼくはたゞ君と飲んだだけなんだ。飲んで、悪酔いしないようにと君からメタボリンをもらい、君の肉に突き刺れた同じ注射の針を、君の愛人の手でぼくの肉に突き刺してもらつただけの、ほんのそれだけのことなんだ。／「グッド・バイ」のはじめの十回は、割合すらくと筆が進んだようであつた。彼はテムポの速い、ちよつとユーモラスなものにし度いと言つた。新假名づかい、漢字制限のことには案外あつさりして、ある時代の自分の作品として、新なづかい、制限漢字で書いてみたいと思つていたといい、自分は原稿は舊假名づかいで書くが、新聞には直して出してほしいとも語つた。彼が筆をとりはじめてから、私は彼の希望で、毎週土曜日に彼を訪ねることにした。やつて来て激勵してもらわぬと、何だか不安だというのである。四回ほど出来たとき、私は彼の仕事部屋でそれを讀んで、「こいつはちよつと下品だな」と不満をもらしたのだが、彼は素直にそれを認め、／「いやこれからだん／＼上品に行きますよ。まあそんなに心配しなくたつて、ぼくの小説が面白くないということはないんだから」／と満々の自信を語るのだつた。彼はこれをもつて、作家太宰治の一生を決する仕事と考えていたらしい。「千草」のお主婦にもその意を含め、訪問客は斷わるようにつとめていた。その意氣込みはうれいものだつた。それにしても、十回以後はまるで進まなかつた。彼はそれを、税金の減額陳情に駆けずりまわつてゐるためと弁解していたが、書き悩んでいたのが事實であらう。毎日血たんが出る自分

という太宰である。いつ倒れられるやら判つたものではない。新聞掲載がはじまる前に少し書き貯めをしておいてもらわぬと社の方で困る。藤澤の小説もあと僅かとなり私も少し焦り氣味になつた。／失その前日の土曜日、私は他に所用があつたため訪ねることが出来ず、十回分の校正刷を持たせてやり、月曜日にはさし繪の吉岡堅二氏と共に行くから、原稿が出来ておれば使の者に渡してほしいとの手紙を添えてやつた。だが使は手ぶらで歸つて來た。そして約束の月曜日、吉岡氏と私は夕刻彼を訪ねたのであるが、もうこのとき太宰治はこの世にいなかったのだ。私に残されたのは、三回分の原稿と、十回分の校正刷であつた。／こゝにして、太宰よ、ぼくは君の魂膽が分つたのだ。グッド・バイだなんて、君は始めからぼくを茶化してやがつたんだ。グッド・バイ十三回、十三回の意味はどうなんだ。ひどい奴だよ君は。君はぼくに書かずに、ぼくに書かせやがつた。君たちの捜査願だ。始めて會つた奥さんと三人の子供さんを前に、ぼくは書いたんだ。ちびた筆でね。おかしいか。おかしければ笑え。こんどはぼくの方で約束した八十回のグッド・バイを言つてやる。グッド・バイ、グッド・バイ、グッド・バイ、とね。中略。ではこれがほんとうに八十回目グッド・バイだ。／校正刷には鉛筆で誤植の訂正がしてあつた。十二日には、まだ書き續ける氣はあつたのだ。十三日の十三回。太宰は皮肉である。／（朝日新聞東京本社學藝部長）

この末常卓郎「グッド・バイのこと」の末尾には、かこみつきの、つぎのような文章がみられる。

編集締切後急にこの絶筆を追加集録することとなり、本號にかぎり

十六ページの増ページとなります。したがってこの増ページ分は仙花紙を使用しました。御諒承願います。

如是我聞(四)・新潮・七月号、夏季小説特集、第四十五卷自七号・昭和二十三年七月一日発行・218頁

〔付記〕初出誌「編集後記」には、つぎのような記述が見られる。

太宰、坂口、石川といふ顔觸れを揃へることは雑誌編集者として誰もが一応考へるプランであるが、太宰氏生前には遂に一度も実現されず、死後はじめて絶筆「如是我聞」と共に本誌で顔が揃つたのは皮肉なものである。坂口、石川両氏ともに、太宰氏とは生前深い交友ではなかつたが、この三人の文学者の本質的な繋がりが、終戦後の文壇の第一線を象つてゐたとも言へよう。両氏の文章を太宰氏の墓前に手向ける。／本号は夏季小説特集号であるが、内容は太宰氏追悼号のやうになつてしまつた。巻頭の写真はこの三月、太宰氏の好きな三鷹上水の堤で撮つたもので、服装は暑くらしいが記念的なもので掲載した。

初出誌の巻頭には、「太宰治氏(昭和二十三年三月・三鷹上水附近にて)撮影田村茂」の説明を付した写真が一葉掲げられており、目次には、「如是我聞(絶筆)太宰治」とある。なお、初出誌は、「昭和廿三年六月廿八日印刷納本」「編集兼発行者斎藤十一」「発行所／東京都新宿区矢来目七一／株式会社新潮社」で、同誌には、石川淳「太宰治昇天」、坂口安吾「不良少年のキリスト」の諸稿が掲載されている。

黒石の人たち・月刊「読物」・薫風号、第一巻第五号・昭和二十三年七月一日発行・2頁

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦(近代文庫23)』(創芸社、昭和二十七年七月一日発行)に、全文収載された。

〔付記〕初出誌「黒石の人たち／太宰治」の標題の下には「〔カットは阿部合成画〕とありまた同頁下段には(不浪人)の「太宰治の絶筆のことなど」と題する、つぎのような文章が見られる。

太宰治から随筆「黒石の人たち」と手紙を貰つたのは、太宰の死んだ直前のことであつた。私は「知事と太宰治」と題する一篇を書きたい氣持になつて書いた。／それが、六月十三日の夜、山崎富栄と二人で情死したのだから、不思議と云えば不思議である。私の月刊「読物」に寄せた太宰治の随筆は恐らくは絶筆であろう。／拙稿「知事と太宰治」は何か予感でもあつて書いたみたいものである。事實は偶然の一致でしかないのだけれども……。／そこで月刊「読物」鎖夏号には「太宰治を想う」の特集を掲載することにしたのである。鎖夏号に期待をかけて下さい。

初出誌目次には、「黒石の人たち……(絶筆)……太宰治」とある。

初出誌は、「昭和二十三年六月廿五日印刷」、『編輯兼発行人野呂長三郎』「発行所／青森県黒石町駅通り／月刊読物社」で、同誌には、小林不浪人「知事と太宰治」、太宰治「黒石の人たち」、稲見五郎「礼文島と私」、竹内俊吉「李順永」、平井信作「友遠方より来らず」、雨森卓三郎「酒爛」、食満南北「近頃の私」、沙和宋一「恋愛ばやり」、大石文久「跡目相続」、菊池仁康「餓狼」、高木恭造「衣食住に就て」、川上三太郎「川柳の味」などの諸稿が掲げられている。

人間失格(第三回)・展望・八月号、第三十二号・昭和二十三年八月一

日発行・35頁・49頁・「小説」欄

〔付記〕初出誌には、「第三の手記」の「二」（35頁・47頁）と「あとがき」（47頁・49頁）とを掲載。末尾に「（完）」とある。初出誌表紙には「小説人間失格（第三回）」、目次には「小説人間失格」とある。また、初出誌「編輯後記」には、つぎのように記されている。

自身の文学の最高峰を示す自画像「人間失格」を本誌のために書かれたまま、忽然世を去った太宰治氏を追悼して、「太宰治論」を掲載した。現代の日本文学からこの一つの星の消え去ったことはかぎりない寂寥を覚えさせずにはおかない。御冥福を祈る。

なお、初出誌は、「昭和二十三年七月廿五日印刷」「編輯者臼井吉見」「発行者古田晃」「発行所／東京都文京区台町九／筑摩書房」で、同誌「小説」欄には、太宰治「人間失格」、宮本百合子「道標（第十一回）」が掲載され、また、臼井吉見「太宰治論」も掲載されている。

家庭の幸福・中央公論・八月号、第六十三年第八号・昭和二十三年八月一日発行・57頁・64頁・「小説」欄

『桜桃』（実業之日本社、昭和二十三年七月二十五日発行）に、全文収載された。

『太宰治全集第十五巻人間失格』（八雲書店、昭和二十四年十二月十日発行）に、全文収載された。

〔付記〕初出誌目次には「小説家庭の幸福」とある。また、初出誌「後記」には、つぎのように記されている。

★この春執筆の「家庭の幸福」は図らずも太宰氏の遺作となった。突然の死を哀悼する。（英吉）

なお、初出誌は、「昭和二十三年七月廿三日印刷」「編集人山本英吉」「発行人栗本和夫」「発行所／東京都千代田区丸ビル五階／中央公論社」で、同誌「小説」欄には、太宰治「家庭の幸福」だけが掲げられている。

やはらかな孤獨——「樹海」について——表現・八月号、第三号・昭和二十三年八月一日発行・44頁

『如是我聞』（新潮社、昭和二十三年十一月十日発行）に、「樹海」序　やはらかな孤獨——宇留野元一のこと——の題で、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日発行）に、「やはらかな孤獨——宇留野元一作『樹海』まへがき」の題で、全文収載された。

〔付記〕初出誌表紙には「樹海」について　太宰治——とある。宇留野元一「樹海」も同誌44頁に併載、「樹海」末尾には、「（一九四八・一）」とある。初出誌は、「昭和二十三年七月二十五日印刷」「編輯者林達夫」「発行者角川源義」「発行所／東京都千代田区代官町二／角川書店」で、同誌には、太宰治画「海やまの鳥けものすら」（解説「（野原一夫記）」、豊島与志雄「太宰治君を悼む」などの諸稿が掲げられている。なお、宇留野元一著「樹海」（理論社、昭和三十二年三月発行）にも、巻頭に「やはらかな孤獨——『樹海』について——」が掲げられている。同書の宇留野元一「あとがき」によれば、「作品の題名を太宰治氏につけて頂」いたのだという。

第三巻後記・雞肋集井伏鱒二選集第三巻・筑摩書房・昭和二十三年九月二十日発行・293頁・297頁

『如是我聞』（新潮社、昭和二十三年十一月十日発行）に、『井伏鱒二選集』後序―井伏鱒二のことの題で、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日発行）に、『井伏鱒二選集』後記の題で、全文収載された。

〔付記〕『雞肋集井伏鱒二選集第三巻』は、昭和二十三年九月十五日印刷
「著者井伏鱒二」「発行者古田晃／東京都文京区台町九」「印刷者中内佐光／東京都千代田区飯田町一ノ二三」「発行所株式会社筑摩書房／東京都文京区台町九」で、同書には、『雞肋集』（3―126頁）、「川」（127―195頁）、「集金旅行」（197―291頁）の諸稿が収載されている。

『井伏鱒二選集』後序―井伏鱒二のこと／（第四巻後記）・如是我聞・新潮社・昭和二十三年十一月十日発行・130―135頁

『円心の行状井伏鱒二選集第四巻』（筑摩書房、昭和二十三年十一月二十五日発行）に、『第四巻後記』の題で、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日発行）に、『井伏鱒二選集』後記の題で、全文収載された。

〔付記〕『円心の行状井伏鱒二選集第四巻』には「庭づくり」（5―21頁）、「一風俗」（22―41頁）、「山を見て老人の語る」（42―55頁）、「ミツギモノ」（56―78頁）、「掛け持ち」（79―104頁）、「お濠に関する話」（105―131頁）、「川井騒動」（132―153頁）、「へんろう宿」（154―163頁）、「円心の行状」（164―176頁）、「小間物屋」（177―194頁）、「猿」（195―203頁）、「御神火」（204―273頁）、「鐘供養の日」（274―287頁）、「隠岐別府村の守吉」

（288―299頁）、「吹越の城」（300―331頁）、「防火水槽」（332―347頁）の諸稿が収載されている。

『斜陽』ノート・八雲・十二月号、太宰治未発表作品特集、第三巻第十一号・昭和二十三年十一月一日発行・28―29頁・「太宰治未発表作品特集」欄

〔付記〕全集未収録。『斜陽』ノートの標題の下には、つぎのような記述が見られる。

昭和二十二年版鎌倉文庫の『文庫手帳』というポケットノートに万年筆の走り書きになつてゐる。行数その他、出来るだけ原形を保つように組んでみた。このように作品のノートを取るといふことは氏にあつては全く稀な事であつた。これによつても、氏の『斜陽』に打ちこんだ情熱が伺われるのである。

また、初出誌「編集室雑音」には、つぎのように記されている。

本号は太宰治氏未発表作品の特集を試みた。氏が「人間不信」の燈りを生涯にかざしたことは、それがたとえ限界された『文学』の中ではあつたが、混沌と空白のこの期に万燈に代る一燈たる烈しい光芒を放つたものと思う。卑屈、道化、泣きごと、世に歪曲され誤解されている氏の『人間不信』の凡ゆるジエスチヤアには生きる苦しみ、苦しむことの愛情が痛ましくも深く裏付けられている――この真実をわれわれははつきりと知らなければならない。

初出誌は、『昭和二十三年十月二十五日印刷納本』『編集人亀島貞夫』『発行人中村梧一郎』『発行所／東京都文京区森川町一一一／株式会社八雲書店』で、同誌「太宰治未発表作品特集」欄には、『斜陽』ノ

ト(ノート)」「大鴉(断篇)」「角力(小品)」「亀の子(俳句)」「新年(小品)」「僕の幼時(小品)」「虎徹宵話(短篇)」「無間奈落(中篇)」などの諸稿が掲載されている。

座談會歡樂極まりて哀情多し・鼎談坂口安吾、太宰治、織田作之助、画清水崑・読物春秋・新年増大号、第二巻第一号、創刊号・昭和二十四年一月一日発行・40頁・「新春特集」欄

「文芸」臨時増刊「太宰治読本」(第十三巻第二十号、昭和三十一年十二月十五日発行)に、「未発表座談会」とし「はじめに」「小股談義」「額の広狭」「好色の果て」「哀情について」「関西の女」「女に口説かれる男」「戯作者の心得」などの小題を付して、全文収載された。

「大阪文学(無頼派文学研究)」通巻三十五号(復刊第十一号、昭和四十三年十一月一日発行)の「座談会特集」欄に、「文芸」臨時増刊「太宰治読本」と同じ小題を付して、全文収載された。

『太宰治全集第十巻』(筑摩書房、昭和五十二年二月二十五日発行)に、初出の形で全文収載された。

〔付記〕初出誌表紙には、横書きで「特集」、その下に縦書きで「文壇の三鬼才」「女」を語る／秘稿歡樂極まりて哀情多し／鼎談／坂口安吾／太宰治／織田作之助」とあり、「目次」には、横書きで「新春特集」、その下に縦書きで「文壇の三鬼才」「女」を語る／秘稿歡樂極まりて哀情多し／篋底に秘められし二年有余／今こそ時を得て／読者にまみゆる／鼎談／坂口安吾／太宰治／織田作之助／絵・清水崑」とある。

初出誌の40、41頁には、「秘稿／歡樂極まりて哀情多し／篋底に秘められた二年有余 今こそ時を得て読者にまみゆる」「文壇の三鬼才」「女」

を語る」「鼎談／坂口安吾／太宰治／織田作之助／画・清水崑」とあり、「坂口氏」「故太宰氏」「故織田氏」の写真が掲げられている。本文には、「○小股のきれあがつた女とは——」「○いなせな男」「○どうな

女がいいか」「○歡樂極まりて哀情多し」「○振られて帰る果報者」「○女を口説くにはどんな手が……」「○素人と玄人と」「○女が解らぬ、文学が解らぬ——」などの小題が付され、42頁43頁には「三鬼才酒盛ノ図」、44頁には「太宰氏料亭ヲ去ルノ図」「坂口氏小股検討ノ図」、45頁には「織田氏唱歌ノ図」、48頁には「坂口氏地上二頑張ルノ図」、48頁49頁には「太宰・織田ノ両氏昇天ノ図」などが掲げられている。

また、末尾には「(一九四六・一一・二五)」とある。さらに(E・H)の「後記」には「◇尚本誌の創刊に当り、某関係方面より贈られた座談会『歡樂極まりて哀情多し』は綿上更に花を添うるものと信ずる。」とある。巻号数は、表紙に、「(第二巻第一号)」と記されているのでそれに従った。だが、「後記」に「◇茲に読物春秋創刊号を贈る。」とあるところより、これが創刊号かとも思われる。扉には「創刊号」とある。

初出誌は、「編輯兼発行人伊藤逸平」「発行所株式会社イヴニングスター社／東京都中央区銀座六丁目四番地交詢ビル」である。なお、この座談会は、昭和二十一年十一月二十五日夜、「現代小説を語る座談会」の後で、改造社の西田義郎立合いの下に、雑誌「改造」に収載の予定で催されたものだが、「改造」には収載されないままに過ぎた。

〔追記〕この稿を草するに際し、つぎの諸氏、諸図書館、諸社の助力を得た。記して深く謝意を表する。工藤四代治氏、瀬尾政記氏、谷沢永

一氏、肥田皓三氏、森永国男氏、神戸女学院大学図書館、国立国会図書館、日本近代文学館、筑摩書房、北海道新聞社。なお、長年に互ったこの連載を完結するに当たり、神戸女学院大学研究所にも深く謝意を表したい。

原稿受理一九八五年十二月二日